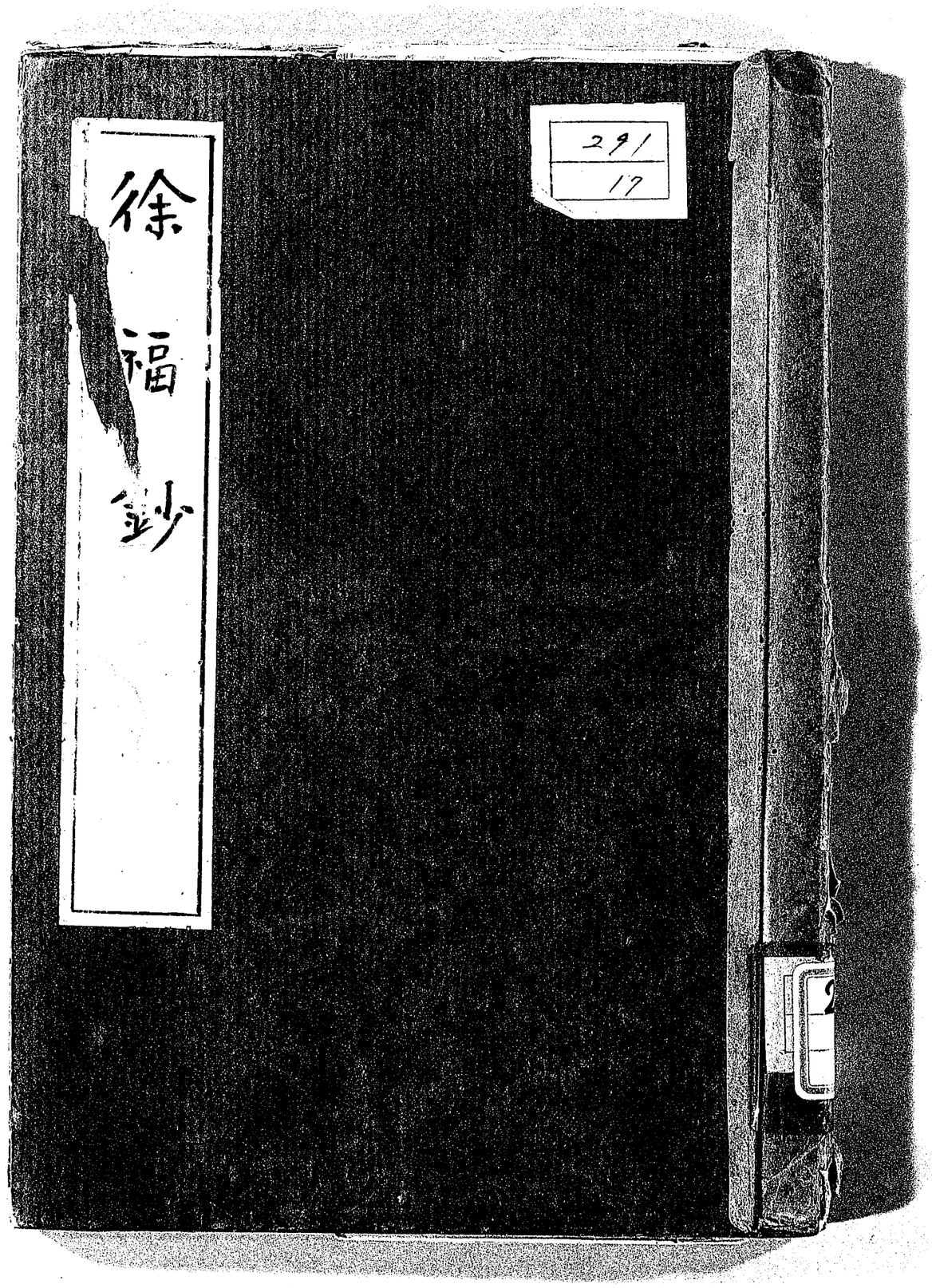


県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

291
12
1

国史略

鉄陣山碧記

中根七郎氏寄贈
参考事項

徐福之事

一 支那ノ人ハ日本ニ行ケバ偉イ国史ニ載ッテ居ルト云フ事ヲ聞キ

二 日本ノ学者ハ未ダ一モ其説ヲ採ラズ

三 九州ニ墓所アリト雖モ、是ノ如キ無理ニ造ラレタルモノナリ

四 徐福ノ時代ハ国史暗黒時代ニシテ如何ニモ仔細アルガ如シ、ナレドモ未ダ至当ノ考ヲ得ズ

五 本書ハ徐福ニ関スル史籍事蹟ヲ網羅シテ自家ノ参考ニ資スルモノナリ

徐福不知川孫おまき
日本古代史

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

紀伊續風土記 巻之八十一、牟婁郡 新宮城下 芝上熊野地、訶
○徐福墓
禾山の東上熊野地の中の方田中より土あり、女地を補築という、蕃墳數株あり、人呼て枯れて朽たる株あり、傳ふ元享僧絶海、明国に行きて大刹を見るや、大祖徐福の事を記せめ、絶海詩を以て答ている
熊野三所徐福祠、蒲山藥草兩能肥、当年徐福求仙藥、直到如今絳不歸
本社私記を按ずるに、
熊野三所合殿 本根現頭牟婁郡、祭神 徐福
豊臣家慶長年間、新宮修営の棟札おゐ、築徐福之墓、遺十五之名、書如皇之旨、（始皇之雷、かの字誤雷）誹蒿世之徳、と有り、又宮又雑記ゐ、摘錄の如く徐福の崩去なりと申し傳ふと有り、又同記ゐ新宮の東社を書せる中の徐福祠あり、南誠公の時石を以地ゐ建させられ、面ゐ秦徐福之墓といふ五字を刻めり、近き頃新宮城主水野氏碑を建て徐福の事を書せり碑文左の如き、

秦徐福碑

後之視今、猶今視昔、遠邪、親邪、不能審其然、豈其然、豈人為邪、以為然則然矣、以為不然則不然矣、而莫有能也信矣、熊野新宮徐福墓、有墓碑、蓋人徒市等止書言、海中有三神山、名曰蓬萊方丈瀛洲、僊人居之、請得奇薬来献童男女求之、於是遣徐福、發童男女数千人、入海求僊人、淮南王傳、市作福、古字通用、莞史吳志孫皓傳、事皆數十家、大抵大同小異、其所謂神仙山者我日東外

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

瀛外、或曰蓬王國、或曰甘為在東海中者別一也、今東海中有當蓬瀛者、無可捨
皇國他求、則莫言日本有得其實也必矣、皇國称蓬萊者、亦往古一、蓋楚古帖、以為富嶽、傳徐海大祖、崇景濱、以為熊野、或以為熱田、以秩形考之、熊野者 自皇國極南之地、瑣出於大瀛中、於船於吳越之地者、遭飄激則必未於斯、如吉備公亦然矣、至于今吳越之船、漂至于此者、不可勝數、則海路之便可知也、然則所謂蓬瀛者、其為熊野又奚疑焉、求諸熊野、新宮之地有徐福祠、又有徐福之墓、又某墓側有七家相傳秦徐生所親信者、或曰痙大所齋、宅則有發之者、獲器物數件、非世之所有、珍而弄之、家人俾狂珍而痙故棄之、其事皆古矣、蓋之國籍、最寛勘文引熊野社記曰、徃昔甲寅年、

天台山王子信之旧跡也、在記又曰漢司空将軍楠子墓侯、窮請権現於模本、又曰 孝昭帝時南蛮江賓主、乗船而来、會悪風而船壊、獲免者僅七人、三人者造船還本国、留而事神者四人耶
皇俾権現祠、子孫繁昌遂為新宮氏人、故數説紛紜不同、其為殊域之人有則一也、蓋徐生之避秦者、因脩祖之當耶 孝霊帝時、
孝霊者昭中何僅隔 一帝、彼此所傳年紀有徴若耳、必是一事之事、彼言発童男女数千人、此言船壊獲免者僅七人、上古悠邈所影響追存存没参差、誰得而詳之、宜乎我以為王子信、我以為漢司公将軍、我以為朝臣江賓主、皇朝月夜望遠之説乎哉、當此之時 皇国未有漢字、徐人徐之臆時而筆之、能存名称不相合而
若乎徐生也妥矣、生之子孫昌熾而能守業、以事神焉、於是乎能祠其祖、守其墓、再来第二千一百有餘年、世之変化無窮、

而至于今毋亡者何其盛哉、嗚呼徐生、當秦燔籍雲之日、遁
其毒手、逋身於方士、獨厚其盧不免也、逮三神山之說、以為僊樂
国之謀、士気知東方有君子国者耶、孔子乗桴而浮海、生甚
成孔子之意者耶、戦国之時有魯仲連者、校其曰、秦若為
帝則、連有蹈東海而死耳、吾不忍為之民也、天下皆然
惰其言、然連唯言耳、比諸福之大者、適絶塵則霄壌矣、
然則蒙延信萬之人、其皆能信行、就有出于生之上焉者
也哉、惜也縁之論者不能詳其事、以方士視之、以玄唐說
之、吁易哉、元文元字新宮城主水卿大炊頭忠昭朝
臣、使立石以表其墓、猶未有銘也、今茲丁未好古奉命巡
有熊邸、探討故事、尚遺跡之儼然者可不記明之哉、於是
乎碑而銘之、嗚呼芒々今古内萬国、列峙千山或之終、又或
有未遂瀛焉者、其未而徴于斯碑、銘曰、
瀛蓂暴雪、芙蓉群生、蟠桃結実、樂國終
所、尚茲蓬瀛、洛化館德、于孫繁祉、忠言潜銷、堅密萬
祀、遐矣西土、来観国風、
文保六年歳在丙未冬十月

仁井田好古撰並書

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

中根七郎氏寄贈
参考事項

91
17
1

徐福之事

一 支那ノ人ハ日本ニ行クト信ジ、国史ニ載セ、
二 日本ノ学者ハ未ダ之ヲ排斥スル
三 丸舟ニ乗リテ行ケリト国人ハ能ク熟知シテ居ル
四 徐福ノ時代ニ国史皆見ヘ付ケラレ如ク詳細アルニシテ カツテ未ダ至定スルコト及ハス
五 本書ハ徐福ニ関スル史籍事蹟ヲ網羅シテ自家ノ参考ニ資スルモノ

徐福不知川所在
日本古仙史

古座高校図書館
28.10.21
蔵書NO 3943

徐福ニ関スル書籍

本書ニ収録シタル書籍

徐福来記	徐子記
支那皇紀	神仙記
名付記	述異記

国書ニ引用ノ書籍

徐福来記	人皇記
支那皇紀	歌物集
名付記	

本書ノ収録シタル書籍

本書徐福之巻	徐福系図
十八史略	五十仙記
国史略	
熊野巡覧記	

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

中根文庫

徐福之事

一 支那ノ人ハ日本ニ行クト雖ドモ國史ヲ讀ム者ハ未ダ之ヲ採錄スルヲ見ズ

二 日本ノ學者ハ未ダ之ヲ採錄スルヲ見ズ

三 況ンヤ之ヲ書物ニ載セ國史ニ編入スルヲヤ

四 徐福ノ時代ニ國史皆是時付ナク年月甚ダ詳ナラズ加之未ダ正史ニ徐福ノ事ヲ載セザルヲ以テ後ノ考ヲ待ツノ外ナシ

五 本書ハ徐福ニ關スル史籍事蹟ヲ纂輯シテ自家ノ參考ニ資スルモノナリ

徐福不老川ニ關スル文化史

291
17
1

中根七郎氏寄贈

參考書目

徐福傳ニ參考セシ書目

徐福ノ事蹟或ハ之ニ關スル記事ヲ載セタル書ニシテ徐福ノ名ヲ以テ書名トセルモノハ之ヲ略シ徐福ノ名ヲ以テ書名トセザルモノハ之ヲ略ス

國書ニ列載ノ書籍

徐福來記　徐子記
支那皇紀　神仙記
名付記　　述異記

人皇記
軌册集

徐福之

古座高校圖書館
28.10.21
蔵書NO. 3943

本書ニ收錄シタル書籍

其書徐福之差

六史略

國史略

歴代巡境記

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

紀伊續風土記
佐賀郡誌　佐賀縣神社誌要
和漢三才圖絵
頼陽文忠公全集日本乃記
史記
後漢書
吳志
蘇楚古帖
太宰府覽
琉球代酬記
閩書
聘南記

皇朝世法錄
西國三十三所名所圖絵
紀伊國名所圖繪

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

紅伊萬介土記

古宮郷誌　古宮年中行事　古宮年表　古宮系図

○本書ニ拠リタル書目

某書　徐福巻ノ一章　一
徐福ノ子孫抄　八
大八史略抄　一〇
國史略抄　一二
魏略逸文記抄　一二
紅伊萬介土記抄　一三
佐賀郡誌抄　一五
佐賀縣神社誌要抄　一七裏
佐賀縣誌抄　二四
和漢三才圖会　曽我志　二六　民記　五
歐陽修日本刀歌　二八
支那大使館寄贈書　二九
秦姓ノ事　大日本史　大言海　三〇

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

警頭注記
是書也

其書

都宿禰太郎宅ニ有リシ本文ノ抄錄ニシテ昭和十二年十月二十三日之ヲ複寫シ十月廿五日ノ宵ニ向ツ
テ其書ノ梗概ヲ右ノ宅ニ有リシ徐福末裔ノ記ス所ノ書籍名ヲ合セテ記セシ

第四編　徐福之巻　神皇書記錄書

第一章　正傳　秦徐福

第一　徐福来歴

神皇ノ御世ニ古文書ハ人皇第七代孝霊天皇七十四年ヨリ二山ニ来レル秦徐福及其子孫カ神祇ノ後胤等ト執リ其口碑傳言ヲ記錄シ置キシモノヲ撮リ之ヲ記錄シ置キシモノナリ

秦始(皇)帝三年　即秦國二帝ノ十八年

竟ニ朝嶺山ノ峠ヨリ東海ヲ望ミ給ヘリ時ニ徐福上書シテ童男童女ト東海ニ入リ蓬萊方丈瀛洲ノ三神仙及ビ不死不死ノ藥ヲ求メンコトヲ請ヒ以テ不二山ニ来レルモノナリ(以上徐福来記)

天孫氏より出つ軒轅氏第四の帝を
忠顕氏といふ忠顕氏古世の孫を萬世氏といふ萬世氏夏禹
王の佐く農作の事を掌る子孫世々襲ふ仕へして其亡び終
又朝に仕へを萬世氏四十八世の裔を正勝といふ正勝文學を
能くし地理を精しく出て、周の武王に仕へて功あり姓を倭と賜
ふ楚國の爵を襲ふ祖せらる武
天、武雷、武雲、武晴、武賢、武顕、武祖、武力、武春を歴て
鄒子会稽の宮を守る所となる第四栄楚惜熟父祖の領地楚
を継ぐ因せしかとも遺ふ栄公女と共に巡れて深山の大洞を墓れ
農事をを事としたりける栄公女雄田、春田、園永、河山、
倭子、原田を倭子給ふ至る子給孔氏の門に入り学を修む
子孫世々儒学を以て顕はる二十四世忠永の女真仁婦人を

娶り太達を生む太達萬永の女小日婦人を娶り玄立を生む
玄立。建山の女沢江婦人を娶り武倫を生む武倫又倭山の女玉木婦
人を娶り長良を生む長良三永女の弁仁婦人を娶り花雅を生
む雅春正に仕へ儒係を封せらる齊知婦人を娶りて倫福を
生めり、

倫福は名を倭子 一作倫市古文書、という倭福は才学ありて博く
儒学を修め終天に至り渡り佛書を求めんが為に安南に帰る春正
政に仕へ勲功あり辞して官位漸く陞進して始る辞用せられ紫
の官女福壽婦人を娶る、子を福正婦人 一作福井という倫永
女なり 正天下を統一して則ち自ら姓望帝と稱す 三年 紫四二
十八年 春東の方郡縣を巡狩して扶桑山の嶺より上り東海を望ませ給ふ
倫福偶ま遥に蓬莱山島の見はるゝあり皇帝乃ち宣辞世ず給

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

又は支那

初メノ上陸地、九州カ
倭漢三才圖

ふ徐福乃ち止まりて王となり平原廣沢を得て以て居り
世界の大元祖すて大元祖々の神仙の止れるあり当つて老不死の
薬あり若し之を服せば千萬歳の寿命を保持することを得べし臣
数千童男童女五百人と海中に入り之を索めんと請ふ乃ち詔して其
良薬を求めしむ、徐福又妻をらく之を求めんとす十五
年過ぐるも三十年を要せざるべし故に相当の船舶を要す即ち金銀
銭砂金珠玉及び衣食器具並に大船八十五艘を要すべしと乃
ち皆言の如くして装造せしめ徐福乃ち同十年六月二十日徐福
は童男童女五百人を率ゐ糧食種を大船八十五艘に分乗して
発したりけり（以上徐福来記、徐福渡来記又は皇記
一行は二蓬莱山を目標として海上東に向て航せり船舶こと家
畫夜となくまりけり偶々一島を認む即ち二蓬莱山なりとて

徐九州ノ訛ニ徐福ニコソ
如何ノ佐賀郡ノ金立山ニ社アリテ宝ニ
ホノ金立社ヲ徐福ヲ祀ル
遥カニ石ニヲ望ム

第二ノ上陸地、本國熊野

衆大ゐに喜ぶて上陸し一面ゐ富ゐと士ゐれとも富て次山を見を乃ち
此島ゐあらしとを知一行元の船ゐ帰り乗ゐ大海を東南ゐ向ひて
航し来れるゐ左右ゐ島あるも不二蓬莱山の現もるを認む一行三百餘人大ゐ悦び喜
東ゐ向ひて航しけるゐ」は天晴れ浪静かなりしかを偶々東方
海上遥ゐ不二蓬莱山の現もるを認む一行三百餘人大ゐ悦び喜
れと之ゐ遥拝をを為しけるを以ゐ於て船を早めて航けるゐ何時しかを
山をも見失ひけり然れとも其の現れし方ゐ向ひ船ーけるゐ會々富士山
を認む後を不二蓬莱山ありとを知ゐ於て船を転じ一行皆
上陸をを得ゐけるゐ時ゐ十月廿五日 孝霊天皇 七十二年 ありき 然るゐ不二蓬
莱山と容貌異なれるものあれとも一行且つ驚き且つ怪しみき乃ち
先つ其地ゐ在を守ゐ部署して山を登めゐものとを東南ゐ分れ日
々彼雲ゐ於て一ゐ漸く不二蓬莱山を認めり時

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

お昭和上陸後二年を過ぎお後事したりけり後福男童
困 一作紀日後の本之跡の大山大なるいふ 孝霊天皇七十四年
九月十三日一行京船お乗り女房附けたりしを二艘葉山を目標
とて進お船一けり十有餘日にて遂お住吉(スミヨシ)家(ノヤ)の山下記(ふもと)急ぎ
陸したりけり扇ち岡村驛より水久保驛を経へ山村を経て不二道
葉山の中央吉夫原お降り川を駅り阿祖谷の山室家登都驛お
著しけるも十月十五日なりき先つ阿祖山太神宮初め各七廟お拝
礼をなせ実お大室の原お止り後中室お移りぬ童男童女五
百餘人我も中室我も大室お居を占めおけり一行中おい我い農
夫、大工、塗師、鍛冶、紙師、紙漉、染人、仙人あり
我も衣類仕立女、酒製造、油製造、醤造夫、あり我も鍛冶
夫、鋳物師、諸細工夫、石工夫あり、我も塗師塗者。あり女他各

種の諸職夫ありて各其職業お修事したりけり後福男童
女を督して先つ麦畑を養ぬしめ又婦女等をして
機を織らしめけり 以上後福来記、五十一代記、後福記、神仙記事物集、
此内宮祠偶々石二山元宮七廟物惣名阿祖山太神宮お奉斎し来り
き昔ち後福の来朝を聞き大和の帝王より後福及
び昔ち後福の来朝を聞き大和の帝王より後福及
び女子福永等お徳ぶを受け後福等を信ずること特に厚
かりき後又男女仙童を伴ひまり父子共お女嬢奥を営むお
門葉あるおより矢仙宮祠をして奉お縁みて羽田矢仙宮祠と稱
せしむ後年仙宮祠宮祠を大室お止りぬ、奉後福を初め弐
内宮祠等の諸を容れ其宮を徳ぶや皆天原お於ける神祇の
後胤等来り教を請ふ昔ち阿祖山太神宮の宮守日長祖佐男命、古
ナつ世の後胤屋羽張田彦、女よろ石二田彦ま国司長大宮祠令、古

四世の後胤小童高女子阿加彦世々筑紫に
まことに好子孫と言ふ天孫の申来並に各古記古
伝くるに違ひ、更に粉飾を施すことを
を恐れ之を録取して世に傳へむことをこゝに勉みける

後裔を再修宮守司長屋羽張田彦女子石二男彦、剛司長小室彦
女子阿加彦を初め宮守部たり大事記命の後裔、火照命の
後裔、火須勢理命の後裔、日子火
裔、天太玉命の後裔天児屋根命の後裔並に平宮守部たり第日
子命の後裔、天火明命の後裔、金山毘古命の後裔、伯田毘古命
の後裔、大物主命の後裔、武磐梔命の後裔、経
津主命の後裔、稚武王命の後裔、建(浦)名方命の後裔、豊城
入毘古命の後裔、味耜高彦根命の後裔、稲倉魂命の後

十二史談考

裔、天香語山命の後裔、五十猛命の後裔、
櫛明玉命の後裔、阿加毘古命の
翁命の後裔、顕国玉命の後裔、豊玉武毘古命の後裔、
母命の後裔、宮照毘女命の後裔、天細女
鈿女命の後裔、所謂宮天原三十六神戸あり神祇の後裔等ゐ
執き其口碑、口誦、傳言並ゐ各家ゐ秘蔵ゐて傳れる種々の実
記録及各家譜等を綜合して、十二史談を作る之を一ゐ倭福
傳とを稱し此後又倭福の子孫の録即ち倭福
神祇の後裔等の秘蔵せる実記録及系譜等は神祇ゐ於て
先の書き置きまし、その上更に種々
の油を加へて磨りかきまし編次して相の善、
竹の葉又ゐ竹片等くは木片ゐ文字をいて書き附たる

そのむり 徐福いふ小童を座のお山に登らせ給ひ
れる藥師如来を安置し奉り且新秋より十二月迄
福傳ふる各種の寶物を納めて阿祖山本神
徐書一千八百五十巻女他各種の古文書、
宮の寶物とおせり是より秋古文書、
宮司の於て保護することゝなりたりにけり、
人皇八代孝元天皇七葵巳年二月八日秦徐福吉天原中宮
お於て薨ず中宮祠皇山の陵
を傳へ特お神社よりの事績を修繕を傳へるかゝる古功績偉大
なるものあるを以て時之を稱し神我の如くして之を祠れりと云
徐福来記、天代記、人皇記、神代記
五十一代記、徐福記

第二 童男童女

童男童女とは秦始皇帝徐福の
徐福の三神山の神仙及ひ不死の藥を求めん
朝せしめのり童男童女中各 老人にて男なるもの三十五人、
女なるもの四十五人、又妻ある男百三十八人、夫ある女百四十五人、
内七人寡婦、又若人にて男なるもの四十二人女なるもの四十三人、又
幼人にて男なるもの五十二人、女なるもの四十八人とを、而して徐福の
一行は十二人を合せて五百五十八人なりき

徐福一家、妻徐福、妻福正女、長男福永、嫁白蓮女、二男福萬、
三男徐仙、四男福壽、長女天正女、二女壽安女、三女安正女、孫一丸、同
次正女、以上十二人

家人男子、徐永、徳正、福行等三十五人
老人女子、清白女、美白女、負流女等四十五人

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

駿河ノ五人

有妻之男、利益、忠時、
有夫女、内七人、寡婦、就永女、天就女、明永女、等百四十五人
吾人男、元定、信永、國時等四十一人
若人女、阿根女、貞月女、佐加女等四十三人
幼人男女、貞秀、仲天、可天等五十一人
幼人女女、比賣女、比久女、興里女、等四十八人

第三　徐福ハ徐永ノ女福子孫

秦徐福ハ徐永ノ女福子ヲ娶リ福永、福壽、徐仙、福壽ノ四
男等ヲ天ニ女、壽安女、等ヲ生ム福永ノ三女ヲ挙ク、偶ニ秦始(皇)帝
ヨリ請ヒテ蓬萊山等ノ神仙山ヲ求ムルヤ、伴ヲ日本ヘ
来リ遂ニ富士ノ麓ニ至リ、又福岡、福海、
福住ノ三男ヲ設クルヨリ至レリ長男福永ヲ父ノ後ヲ受ク次男

徐福ノ男福壽(福岡ト改ム)亦幽野ノ末ノ神社

七男名寄七
家
朱漆ノ宮ヲ里
建テ之ヲ祭リ
而シテ以スリ如
何ニセ

福萬ハ名ヲ福島ト改メ父ノ命ヨリ繼ヒ日本ヘ航行ノ途次遂ニ
上陸シテ二山(ヲ)営メテ三年居住シケル本日國一松紀日條
り考土地ヲ開墾スルヿトセリ乃チ蓄積五十餘人ヲ従ヘ駐日國
ヨ移住シ給ヒ徐福社祠ヲ造営シ徐福ノ霊ヲ祀リヌ三
男徐仙ハ名ヲ福山ト改メ四男福壽ハ名ヲ福田ト改メケリ、七男
七男ハ名ヲ福山ト改メ四男福壽ハ名ヲ福田ト改メケリ、七男
七箇所ニ別レ女子孫皆ヲ童男童女ノ子孫ト称シ徐福ノ内外
ニ繁殖シケリ、多ク秦ヲ姓トシ又氏ヲ福ノ一字ヲ称ヘヌ第二
代秦福永ハ一要領ノ女白蓮女ヲ娶リ一丸次正女ヲ挙ケシトキ
事ヲ告ヲ父ヲ経ル日本ヲ渡リ一丸長ヲ徐光ト称ヌ後福永
名ヲ福岡ト改メ子孫ヲ福岡ヲ氏トセ第三代徐光ハ誠

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

原本本行福壽ヲ告ゲ又行取リ返ヲ重複セリ之ヲ定ム

傳世女
仙の女 訓仙を宮占し猶仙を大山祇命の
四世の孫神皇孫男命の女栲
姫身体男命を頼り阿祖山大神宮の神宮の
取扱終を猶せられ子孫代々其職を承継しも
後の女王手嬢を娶り後吉を
都手嬢を娶り猶壽を生む第七仙福壽は海幸彦
坂王の女乃自嬢を娶り福永を
八仙福岡阿祖より第九仙福岡福国第十一代
福岡福真第十二仙福岡福清、第十四仙福
岡後教第十五仙福岡後佐、第十六仙福岡
後秦、第十八仙福岡後長第十九仙福岡後房、第二十仙福岡
後最第二十一仙福岡後泰、第二十二仙福岡後幸、第二十三代

奈良ヽ福
後ナルヘシ

福岡長宇、第二十四仙福岡後賢、第二十五仙福岡後信第二十
六仙福岡秦後、第二十七仙福岡秦綺を至る山後諱を改むる
となり福綺の諱を後清たるより越ゆ福岡後佐、第十八仙を福岡後秦と
第二十八仙を福岡秦十六政福と称し第二十九仙を福岡後秦と称し
福と称し第三十仙を福岡蕃十六後教とを称し仁
延暦十九年富士山大噴火を
せられ神仙の古跡を宮ゆ遠一ゆ
太神宮の大宮司源大夫元秀は
教と共ゆ後福傳、宮川日記、女他の古文書及び宝物を擁護
して難を雄神国吉登郡早女郷岡田原ゆ避けゆ新ゆ移
したる宮川神社の傍ゆ宝蔵を営造して齎し来れる古文書
宝物を納めより再ゆ福岡後秦はゆ他ゆ居住し岡神社

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

の神宮と称り出る月と共に世々古今に
亡く上高州徐福来泊、五十
一代記、州徐福墓（福）延暦死

徐福ノ世次ト年数（異説調査）
（五十二代）
（四十八代）
（七世）
（六世）
（七世）
（七世）
（七

右上掲所記、計答、擦り丗數、上記ノ如シ

昭和十二年十月廿二日　中根七郎

元　福岡縣庁　二十　福岡縣多　廿一　福岡縣海　廿二　福岡縣幸
廿三　福岡縣筑紫　廿四　福岡縣信　廿五　福岡縣幸　廿六　福岡縣筑紫
廿七　福岡縣筑紫　廿八　福岡縣立女子師範　廿九　福岡縣立福岡中学校

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

末三神山及仙藥
三神山者其山皆黄金白銀爲宮闕藥皆美及不死藥

十八史略　巻之二　秦始皇（二十八年　盧陵曾先之篇（元朝人）

秦

秦始皇帝立

二十八年始皇東行郡縣上鄒嶧山立石頌功業上泰山立石

壽阿祀　既下風雨暴至休樹下封其松爲五大夫禪梁父遂

東遊海上方士徐市等上書請與童男童女入海求蓬

萊方丈瀛洲三神山仙人及不死藥乞其言還報市等行

熊野詣古跡
飛鳥社内
有徐福祠
是著

國史略　卷二、八下表　從五位下行大藏人勝善吉　撰士頂於甸文政九年著（岩垣東園）

孝靈天皇

十十二年秦人徐福來　我書徐福字子臺男女一千人齎三墳五典
來蓬不得還留不歸秦云

止富士山有徐福祠　或云熊野山

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

秦徐福墓　寺田ノ中嶺ニ巍ト立ツ所ニアリ相傳ル秦人徐君房カ墓地

又新宮ヨリ東ノ方ニ當リ那智山トモイフ秦始皇方士徐

福ヲ遣ハシテ童男女數千人ヲ連レテ海ニ入リ蓬萊神仙不

死ノ藥ヲ求メシム　徐福日本ニ來リ南紀熊野ニ止リテ

ここに葬ル　其子孫秦氏ヲ賜レリ　時徐福孔子ノ全經ヲ

齎來リ朝廷ニ奉ル是孝靈天皇七十

二年ニ當レリトカヤ　徐福ノ事ハ中華ノ史籍ニ見ヲ載セヤ

明白也、　史記始皇本紀、後漢書東夷傳倭國ノ部、並ニ

吳志、秦楚六帖、歐陽文忠公集、琊琊代酔編、聽雨

記譚荃ノ書ニ見エタリ、應安元年日本ノ僧絶海ノ明

應安北朝
年号後光嚴
院時代南朝

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

二千余年未亡

二使セン時明ノ太祖徐福ノ事ヲ尋ネ玉ヒシニ絶海詩ヲ以テ答ヲ曰ク

熊野峯前徐福祠、満山薬草雨餘肥、只今海上波濤穏、万里好風須早帰

太祖感賞シテ和韻ヲ賜フ

熊野峯高血食祠、松根琥珀也應肥、童年徐福仙薬（去仙）、直到如今（去）不（入）要帰、

和歌山藩ノ著

紀伊続風土記巻之八十一、名草郡新宮城下村上熊野社ノ部

○徐福墓

永山の東上熊野地の申の方田中ニあり、廻り六歩許、高サ一丈余、石垣を横筑といふ、蕃椒数株あり、今皆枯れて朽たる株あり、傍ニ元享僧絶海、明国ニ行きて大祖ニ見ヘ、大祖徐福の事を尋ね、絶海詩を以て答ていふ、

熊野峯高徐福祠、満山薬草雨餘肥、只今海上波濤穏、萬里好風須早帰

大祖和韻を賜ふ、

熊野峯前血食祠、松根琥珀也應肥、童年徐福求仙薬、直到如今不要帰、

○按ニ

豊臣家慶長年間、新宮修営の棟札ニ、築徐福之墓、遣二十五之名、書如皇之曽、（始皇之誤）とあり、又寛文雑

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

南都公徐福ノ碑ヲ建ツ

記ヲ摘叙ノ如ク徐福ノ崩去ヲ申シ傳ヘトアリ、又向譲新宮ノ求社ヲ書セル中ニ徐福祠ヲ祀リ、南龍公ノ時石ヲ以テ建テさせられ、而ヲ秦徐福之墓トいヒ五字ヲ刻メリ近キ頃新宮城主水野氏碑ヲ建テ徐福ノ事ヲ書セリ碑文左ノ如シ

秦徐福碑

後之視古、猶今有物、不能審其形、以為人耶、以為獣耶、則疑矣、以為在則否矣、雖然所不可之、而其有也信矣、熊野新宮徐福墓、其墓数畝、秦俗曰、秦人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊、方丈瀛洲、僊人居之、請得斎戒與童男女求之、於是遣徐福、発童男女数千人、入海求僊人、淮南王傳、市作福、古字通用、蓋史失志以耳、郡県事志数十家、大抵大同小異、其所謂神仙者、蓋曰東洲、澶州、或曰秦王国、或曰在瀛海中、其名称雖異、其為在東海中者則一也、人今東海中有蓬瀛者、無可怪者、皇国他求、則莫言、日本者得其実也必矣、皇国称蓬萊者、亦彼方一、蒙楚之俗、以為富嶽、僊徐海、大祖、宋景濂、以為熊野、亦以為蓬萊由、以地形考之、熊野者、自皇国極南之地、瑣出於大瀛中、放舟於呉越之地者、遭颶激則必東於此、故古俗以呉越之舶、漂至于此者、不可勝数、則海路之便可知也、然則所謂蓬瀛者、其為熊野又宜疑焉、求諸熊野、新宮之地有徐福祠、又有徐福之墓、又其墓側有七塚、相傳秦徐生所親信者、或曰従其所裔、或則有降之者、襲嚢物数件、非世之所有、珍而寿之、家人尊在恐而瘞故蔵云、其事皆古矣、蓋之国籍、長寛敖文引熊野社記曰、往昔甲寅年、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

天台山王子信之旧跡也、在記又曰漢司空粋軍橘子真侯、卿請
権現於模原、又曰　業昭帝特勅書江賓主、乗船而来、会悪風
而船壊、僅免者僅七人、三人者造船還本国、留而事神者四人　耶
乗件権現祠、子孫繁昌遂為新宮氏人、古数説紛不同、其為独
墓之文者則一也、蓋徐生之碑、孝霊帝時、
孝霊帝昭中何僅隔　一帝、彼此所傳年紀有徴者耳、也是一時之
事、彼言発童男女数千人、此言船壊僅免者僅七人、上古悠遥所
影難追、其沒多少、誰得而詳之、宜乎各以為王子信、来以為漢
刁公将軍、各以為南蕃江賓主、宣独月夜望遠之説乎哉、當於之
時　皇国未有漢字、徐人得之臆特而筆之、能考名称不相合而
云乎徐生也安哉、生之子孫昌熾而能守世祀業、以事神為、故能
乎能祠其祖、守其墓、再来宮第二千一百有餘年、世之変化無窮、

忠昭親王之名
表其墓者猶
神道表乎

而至于今所謂者何其盛哉、嗚呼徐生當秦皇鉢雲之日、遁
其毒手、逋身於方士、猶度其不免也、進三神山之説、以為帰楽
国之謀、亦気知東方有君子国者耶、孔子乗桴而浮海、生其
成孔子之意者耶、魯仲連者、排去而深海、生其
帝則、連有跡東海而死耳、吾不忍為之民也、天下皆然耳、
情其言、然連唯言死耳、比諸福之奔逸絶塵則霄壌矣、
然則秦延信萬之人、其言為信行、就有出于生之上為者
也哉、惜也終之論者不能詳其事、以方士視之、以荒唐説
之、呼悪亦太甚矣、元文元年新宮城主水野大炊頭忠昭朝
臣、使立石以表其墓、猶未有銘也、今茲乙未好古奉　命平
有熊野、探討故事、共尋
乎碑而銘之、嗚呼甚々宜乎千歳當國、列峙千仞之後、又奚

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

有未遂瀛寄右、未而後二于斫碑、銘曰、
嬴秦暴雲、芬芳群生、輝脱鳥学、山玉水哲、業固経
祈、実是蓼瀛、流化館徳、子孫繁祉、当宝潜銷、堅密萬
祀、遜号西土、来観国寡、
天保六年歳次乙未冬十月　仁井田好古撰並書

No.

謹啓
先日参上致しました節は種々と御安治に相成り有難く深謝
致し居ります　又今度は鯨方祥傳集の抜抄御恵贈下
され有難く御礼申上げます
佐賀郡誌等の抜萃を別便にて御届けしました右は
御につまらぬものですが後日より肥前唐津鯨捕りの記はおそく
第御知らせします　肥前
とも七月中旬までにはお届けします　三十数枚のもので
肉二十枚ばかりは給です
はおそくとも今月中にはお返しもまると思つてゐます　今ば
らく拝借　お礼を致します　以
上
長崎縣漁業誌当図書館
にありますが其の内容は玉として捕鯨誌です　その抜萃も
お届けしたいと存じてゐます

SHIRAUME

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

No.

右御礼まで　今後共よろしく御指導の程奉願上ます

十一月九日

中根七郎様侍史

大谷龍次郎

SHIRAUME

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

佐賀郡誌

佐賀縣神社誌要

劒錄

佐賀縣誌

福岡大學大學院研究室（昭和十二年十月十日受）

聖華郡一名村大名龍次郎氏寄贈

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

佐賀郡誌　大正四年十二月発行　佐賀郡教育会編

（三七三―三七四頁「口碑傳説の項中に」）

浮盃（ぶはい）に於ける金立権現

新北村大字寺井津字堀

異本肥前古蹟集抄錄に曰く。

「寺井津は金立大権現御来朝の時、神上らせ給ひし海路なり。坂本の社より垣ノ内離かき海路五り。是権現来現の霊地なれば國中の貴賤市をなし、神水潮をとり佛前に奉り家々に持帰り、大根洗浄の祝とてえを振れば、家内の祈禱となり諸願少ず満足す。」

大谷用慶

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

傳説云、今を距る二千百三十三年の昔、孝靈天皇の二十二年、秦の始皇方士徐福をして東海に入り不老不死の藥を求めしむ、徐福は、童男童女七百人を率ゐて海を航し寺井の辺より上陸せしと、金立神社の裏手河岸は汐井場（祓の水を汲む場）にして金立權現佛上陸の場なりといふ。此如く片葉蘆の茂れるあり、其葉は一方にのみ出づ。是れ權現佛上陸の際おしわけ玉ひしによると言ひ傳ふ。金立權現佛像幸（御幸）の折は各地より集い来りたる人々手に〳〵此の片葉蘆をとり

て帰り祓の爲めにす。又此の如く足痕石あり、権現の足痕なりといふ。當面白き口碑ニそあれ、除福は安着を祝ひて酒杯を海上に浮べしが、其酒こぼれて、不思議にも鳥となせり。之今の浮盃津なりと云ふ。即ち傳ふ、除福、藥を求めんとせしも其あるところを知らざれば神佛に祈願して曰く「ニの杯の流れ寄るところ必ず藥あらん。」とて海上に杯を浮べしが此の島に着きたりとぞ。かゝる靈地なれば大潮、大水起り当国の村は水下に没すと雖も、当津のみは浮き盃となりて浮び

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

祇園祭ハ長崎ノ祇園社ナシ

大日本史神祇志ニ在リ（官社不載者ナリ）
金立神社今在佐嘉郡多布目村
正六位上加佐立命

得るといひ傳へ、当津の人の誇るところにして
祇園祭の燈灯の絵、消防夫のしるし等に浮き盃
の絵を用ひたり。今も当津に大盃あり、権現の
来り玉ひし盃なりといふ。別に権現が盃に乗り
て渡海せらるゝを畫ける巻物一軸ありしが二
十年の浮盃の大火に焼け失せたりといふ。

（四〇九―四一〇頁「古社寺」の項中に）

金立神社　金立村

金立山上二十六町尺の高地に鎮座す。保食岡象女
命、相殿素除福を祭る。建立の年月詳かならず。

三代実録巻四に云。

貞観二年二月八日肥前国ニ々授正六位上金
立神従五位下

同書四十六巻に云。

元慶八年十二月十六日授肥前国従五位下金
立神従五位上

鎮西要略に云。

孝霊天皇ヲ云方士隙々来止日本ニ云ヘ築紫肥
前州金立霊上山徐福止跡之霊地也

下文参考ニ依テ修正ス

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

徐福渡来の因縁に就いては漢楚軍談巻ミに左の如き旨の文あり。云く。

昔秦始皇顕慶殿に午睡し不吉の夢を結ぶ。始皇心に安からず急遽都城咸陽に還幸し群臣を集めて長生不死の薬を求めん事を議ず。宋無忌曰く東海の中天下に君るべきを議ず。宋無忌曰く東海の中三つの仙山あり。十洲三島蓬莱方丈の諸山八萬寿の如く四時清朗にして寒暑を覚えず甲子を知らず。此中に長生不死の薬ありと伝聞せば寿命窮りなかるべしと。始皇曰く御此の

仙山を見たるか。宋無忌が曰く方士徐福と申す者皆て東海に到りて蓬莱方丈の中に多くの仙人鶴に乗りて通逢するを見たり。今臣が家に在り召寄せて宮中に給へど。始皇趣ち召して長生不死の薬を求むべき様を宣らに、徐福曰く蓬莱方丈瀛洲の三神山は海中に在りと雖も風波の難ありて通逢し難し。願くは善き使を得て童男童女を率ひ薬を求むるこそ最も難し大

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

船十艘童男童女各五百人金銀珠玉飲食器用
の物を載せて臣に授給はゞ東海に行て不死
の薬を求むべし。始皇悦りなく喜び詔を下
して方船を造り甲士を発し。徐福遂
に東海を指して出発し。其後杳として音信な
きに至れり。

牛窪記にも殆んど漢楚軍談と同趣の文字あり。
曰く徐巿一番並に蘭姿侍節の童男児廿五百人
を乗せ勅を依て渡海すと称し我が日本に来る。
徐巿は不盡山にめでて駿州に到り徐明は金峰

大谷川盛

信州善光寺参詣

山に入り徐林は肥前金立山に往し徐福は着岸
の津紀州古座に止り後熊野山に入ると。蓋し徐
福以下頑学愛才隠なき賢士なれば私説濫政ゆ
世を避けて遠く神州潤徳の風を望み不老不死
の薬を求むと偽称して我が国に渡来せしもの
ならん。当社の由緒に就ては肥陽古跡記にやゝ
委曲を悉したれば茲に録せん。

佐嘉郡金立霊上寺は孝霊天皇七十二年秦始
皇子三皇子徐福方子童跡にして三社権現と
顕れ給ふ。本地薬師如来阿弥陀如来観世音菩

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

薩也。中比慈覺大師參詣之時造給夢像也。檀現
来朝之時金銀珠玉之餝来船童男童女七良人
歌舞音楽を調へ舳前風寺并津に佈着船有り
浦人障を奉て饗すると云ふ。子喜んで盃を挙べ
て興させ給ふ。其跡一の島となる。今の挙盃津
是なり。寺并津より白布千端を引はへ其上を
踏て佛舎を通し金立山と移奉る。此千端布を
集めて塚を築き千布里と云ふ。其後彼靈にて
佛法を行給ふ。本坊千妨妙楽寺千坊石寺千坊
歴々として金立の左右のに両部の道場蔦左

雙べ立給ふ。檀上には廊宇蔵菩薩是も慈覚大
師の作也。佛宝殿の後に佛宝石とて高二丈余
の湧出の大石あり。其上に小池あり不老不時
の水を湛へ金立の神に蟠と云つり。権現
佛観念遊ばせし佛宝石あり。庭下礼拝業敬せ
し所に長く廣き石あり是を宜下石と云ふ。後
の佛山に一の釜あり薬師如来此釜にて不老
不死薬を合給へりと云ふ。

延喜天皇の佛殿として毎年二月初午の日此
山の中央なる本寺堂に於て衆徒等天下安鎮

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

の佛法事を行ふ。又七月十四日十五日鳶尾と
いふ高山にて柴灯護摩を焼給ふ。是も國家の
御祈禱なり。九月中の午の日勅使下向有つて
綸旨を宝殿に納給ふ。寺僧は千石千貫の佛経
を讀誦し三社の佛輿を下宮に下し奉る。此佛
祭の役は此國國司筑後國両國より仰て勤行ひけ
るとなり。又佛山北山西山を傳ひ金胎両部の
峰を分け黒髪山権現の御國にて両部の札を
打給ふ。往古の佛縁起に権現御来朝の儀式を
書せりと云。是は神代直長公の寄進なり。

大谷川筋

扨國中古火来神佛漸く混淆して後には神社の
祭祀も禰徒の手より帰しとなれば、当山の靈異を
記すもの佛教的臭味を免るゝ能はず。
或書に云。

或云此山に来り如来に法命を祈奉りければ
不老の菓の畑忽ち立登りけるを拝みたりと
云ひ又権現の使烏と て鷲鳶鳥一番宛神前を
飛翔り今に神の佛使を勤む。古より能処の鷲
鳶鳥来れば皆集りて喰殺すと云ひ。又此処ト
但蕃岩とてあり昔三千坊有りし時或寺の児

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

雀の子を飼養越しを当寺の僧是を聞て雀を
奪ふに児此事を訟ふ。衆徒憤を起し此児を
かしよせ谷の奇につき落し殺しければ一七
日のねに此児の怨霊火焔と成て衆児三千
の孝々に祟はりて殃らず衆無き者を殺しけ
る。此の因縁に依りて今も雀居ることなし云
々。神幸を告給はんとては彼雀人の田に見ゆ
ること有り。是も妙なる神変なり。
3事有り不思議様の事なり。又一年に三度佛滝
出し近国の者驚くばかり雪居に高く見ゆる。

大谷川篠

当社の古文書類写縁ほ存するものあり。社司中
島某之を保存す。明治四年十二月御社に列せら
る。大早久しく雨降らざるときは此神をして浮
盃津の辺まで行幸せしむれば必ず佛雨降る
と言い傳ふ。土人の言に云く。東干布に深苑松と
称する一地区あり。徐福の一行が此地に来れる
とき土人深蔵此如にてえを迎へたる跡なりと
て維新後迄一株の大松樹亭々として天に沖し
たりしが明治廿六年の秋大風の為に吹倒され
たりと云ふ。又此西南方お町の如に立観音と称

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

佐賀縣神社誌要　大正十五年十月発行　佐賀縣神職会編

（四六―四七頁、「金立神社」の項中に）

御社金立神社　佐賀郡金立村大字金立

岡象女神
祭神保食神　天忍穂耳尊
素の徐福

創建年代詳かならざるも、孝靈天皇七十二年二月初午日なりと傳ふ、されば其日を鎮座日として五十年毎に大祭を行ふを例とす。清和天皇貞観二年八月從五位下陽成天皇元慶八年十二月從五位上を授けらる。二月初午日祭は、元正天

する祠より金立社行幸の節は土人必ず其像を奉じて之を送迎でしむ。当観世音は件の深藏の妹にして徐福に召されて其侍女となれる者なりと傳ふ。

西肥古跡詠云。

水徳神祠臨海民。
把倫奏祀如心神人。
舟中五穀童男女。
新築仙山東海春。
もろこしの人も塩路を渡りきて大和を守る神となりけん。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

皇孝元年庚申より始まり九月中午日祭は、醍醐天皇の御勅願により始まりて、素の保福来りて此地に止まりしより、日人も合祀せり、蕨来国地頭の尊崇篤く、新中鍬島直茂治播州来本社の祀祭に重きを置かれ、社殿の造営祭費の供進なり、山林田畑の神領を寄進せらるるさればなり。

旱魃の年には祈雨の為め親しく神前に祈願せらるるしことあり。浮林津下宮沖神島の神等皆攘命によれりと云ふ。明治四年十二月郷社に列せらる。祭神天忍穂耳命は無格社合祀によ

大谷川筋

り追加

氏子戸数　七百八十戸

境内神社　麻浦神社　祭神岐神

佐賀縣誌　明治三十三年八月発行　佐賀縣教育会編

（二三頁）

金立神社　金立村ニアリ、祭ル神倉稲魂命、相殿ノ素徐福ナリ、社伝ニ諸書ニ載ル所ト異ナリ、郷社

三代実録ニ貞観二年本社ニ従五位下ヲ授ケ奉ラレ、元慶八年従五位上ヲ授ケ奉ラレ、筆ノコ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

○蓬萊山

山海經云、蓬萊山海中之神山、非有道者不至、

普陀山志云、昌國北界有蓬萊山、衆山四圍、峙三、於綫小嶼、屹如千丈樓臺、而中霞、又有紫霞堂、與山為鄰、中畔通明、方如大車之輿、潮未一退、人可入、我云人不可到、隱隱有神仙類、墨漫不能辨、其南有東霍山、徐福住舟于此、

按世模蓬萊島鶴舞龜遊之圖、以為慕祝之飾美、未知蓬萊山有人物乎、其快樂何耶、蓋以風景之美、稱之乎、別有稱蓬萊山者、曰熊野紀外富士 順外熟田・尾外 我謂徐福来住憂即富士也、我為蓬野、熟田、未一決、但憂之歷行乎福

之事詳于富士山下

三倉堂大原寺鳴良安著

卜見ユ、今ハ御社タリ、

大谷用筆

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

○富士山

三国無双之名山、関八外望之、其形不異、蓋其顔如八葉蓮花、故所向三峯而其嶮也、譬以十本骨擘肩、中折摺一間為九本骨倒之形、餘仿佛焉、自箱根見之、三峯、自原見之四峯、自江尻見之三峯也

相傳孝霊帝五年始見矣、蓋一夜地斯為大湖、是江外琵琶湖也、其土当大山、駿外之富士也、国史等無其事、依無証、因時有雪、絶頂有煙、江外三上山自簀溢成、故形略似富士

秦徐福入蓬萊之者、即富山也、帝孝霊時而後徙小角始入富山、躋径焉、富属駿外、鳥居在北面甲外地、葬于駿外部、手城天皇云云略之

都良香富士山記云云略之

義楚六帖云、日本国都城東北千餘里、有富士、亦名蓬萊、其山峻三面是海、一朶上聳、頂有火煙、日中則有諸宝流下、夜即却上、常聞音樂、徐福止此、謂蓬萊、至今子孫自秦氏、

秀吉公征朝鮮時云云略之

富士山焼云云略之

清和天皇貞観十六年五月山焼云云略之

宝永四年十一月二十三日地震云云略之

秦徐福来日、本入蓬萊山

史記本紀列傳等徐市等徐福秦始皇使徐福入海求神藥、數歲不得、費多恐譴、乃詐曰臣見海中大神、言曰汝西皇之使邪、汝来何求、曰願請延年益壽藥、神曰汝秦王之礼薄、得観而不得取、即従東南方至蓬萊山見宮闕、有使者銅色而龍形、光上照天、於是臣再拜問曰宜何資以献、海神曰以令名男子若振女與百工之事即得之矣、

秦皇帝太說遣二振男女三千人資二五穀種二百工而行（此時當孝靈天皇朝）

歐陽永叔曰徐福行去遶某時、秦經未焚恐別經書等多携來乎

按徐福來住地、承應郡或熱田、或稱陀洛之近愛遶某山諸說未一決、蓋霧二經行肯矣

（此時當孝靈天皇朝）

歐陽永叔曰徐福行去遶某時、秦經未焚恐別經書等多携來乎

按徐福來住地、承應郡或熱田、或稱陀洛之近愛遶某山諸說未一決、蓋霧二經行肯矣

日本刀歌

昆夷道遠使不通
寶刀近出日本國
魚皮裝貼香木鞘
百金傳入好事手
傳聞其國居大島（先秦）
其先徐福欺秦民（王）
百一（五）五種奥是居
前朝貢獻屢往來
徐福行時書未焚
今嚴不許傳中國
滄波洪瀆無通津
先王大典藏異邦

（歐陽永叔曰世傳切玉能寫我實得之滄海東黃白間雜鍮與銅佩服可以攘厥凶土壤沃饒風俗好探藥淫留此童老至今器玩皆精巧士人往二工詩藻遂書百篇今尚存舉世無人識古文）

吳紘日本傳
子安碑、西嶽
石下見林著
述也即今按
者見林也

今人感慨坐流涕　　鋪陳短刀何足云

古歐陽文忠公全集卷十五

今按司馬溫公集啚亦載日本刀歌、大同小異、恐作秋、玩作用、
蓋沈括筆談通俗作啖字東梓欲往學、恩請張鼐思之博洽、以
日本刀歌、當歐陽永叔之作、歌則後人誤入溫公集與、其先徐
福歐陽子以日本先祖為徐福有非也、宜參考引晉書及世法
錄今按（依吳紘日本傳補之）

史記卷之六

始皇本紀第六

漢太史令司馬遷撰

方士徐市等入海求神藥數歲不得費多恐譴乃詐曰蓬萊藥可得然常為大
鮫魚所苦故不得至願請善射與俱見則以連弩射之始皇夢與海神戰如人
狀問占夢博士曰水神不可見以大魚蛟龍為候今上禱祠備謹而有惡神
當除去而善神可致乃令入海者齎捕巨魚具而自以連弩候大魚出射之自
琅琊北至榮成山弗見至之罘見巨魚射殺一魚遂並海西至平原津而病

之罘芝罘山景有芝罘寺

小學館昭和六十年七月下旬版

荘南王安傳

昔秦絶先王之道、云々、又使徐福入海求神異物、還為偽辭曰、臣見海中大神、
言曰汝西皇之使耶、臣答曰然、汝何求、曰願請延年益壽藥、神曰汝秦王之礼
薄得觀而不得來、即從臣東南至蓬萊山見之成宮闕、有使者銅色龍形光

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

上照天、於是臣再拜、問曰、宜何資以獻、海神曰、以今名男子若振女與百工之事即得之矣、秦皇帝大說遣振男女三千人資之五穀種々百工而行、徐福得平原廣沢、止王不來

于原廣沢

今按太史公所說如此、而本紀曰、徐市到海、因謂其名不同、云為亦異其所止、惟平原廣沢、不言地名、後漢書以為夷洲澶洲、北史及隋書以為流求國、為夷洲、云不能明也、國書編別載徐福祠、恭尋楚人之子孫覽籍山集、世法錄等書、指為日本之地、而於日本傳引證楚人帖芽、故舉其所因也、

徐福來日本國也

循王字非也、徐福來于我為訛、詐見後漢書、今按見林亦謂、日本者神國也、徐福曰、海中大神似能言日本風土、推古天皇上隨喜書曰、東天皇敬白西皇帝、西皇帝者蓋本于西皇之語也、（異称日本傳校抄）

後漢書一百一十五

東夷列傳第七十五

宋宣城太守范曄撰　唐章懷太子賢注

倭在韓東南大海中、依山島為居、凡百餘國、自武帝滅朝鮮、使驛通於漢者三十許國、國皆稱王、世々傳統、其大倭王居邪馬臺國、（今名邪摩惟）

已見上

音之樂、浪邪徽、去其國萬二千里、去其西北界拘邪韓國七千餘里、其地大

音之訛也

與朱崖儋耳相近、故其法俗多同、土（宜禾稻麻紵蠶桑、

儋耳在會稽東治之東、與朱崖

知織績為縑布、出白珠青玉、其山有丹、土氣溫暖、冬夏生菜茹、無牛馬虎豹

羊鵲（鵲或作雀）其兵有矛楯木弓竹矢、或以骨為鏃、男子皆黥面文身、以其文左

右大小別尊卑之差、其男衣皆橫幅、結束相連、女人被髮屈紒、衣如單被、貫

頭而著之、並用朱拾身、（說文曰、拾、塗也、音偏頰切）如中國之用粉也、有城柵屋室父母兄

弟異處、唯會同男女無別、飲食以手、而俎（俎）豆、俗皆徒跣、以蹲踞為恭敬、人

性嗜酒、多壽考、至百餘歲者甚衆、國多女子、大人皆有四五妻、其餘或兩

事見史記
求蓬萊神仙、不得、徐福畏誅不敢還、遂止此洲、世々相承有数萬家、人民時至会稽市、会稽東冶県人有入海行遭風、流移到澶洲者、所在絶遠、不可往来、沈莹臨海水土志曰、夷洲在臨海東南二千里、土地会稽東冶之東、四面是山谿、人皆魁頭、文身、亦有髭無、女人不淫、土地饒沃、既生五穀、又多麋鹿、有犬屈短如獾毛状、其聲如豬、地有銅鉄、唯用鏃格、為甲以鉄、鏃如矛、或以骨為矢、其俗能作金銀彩帛、不知以為貨、交市但以魚肉雑鮓、名之為美、食之以為上肴也、
又巻第一下光武帝紀第一下、中元二年春正月幸東、東夷倭奴国王遣使奉獻、倭在帯方東南大海中依山島為国、
又巻第八十辰韓伝光和元年冬、又飲酒聚、縁辺莫不被髪、種衆日多、又善為幻術、以蠱道殺人、又制鉄不足、給用、以鉄当貨、諸市皆用之、如中国用銭、又以供二郡、俗喜歌舞飲酒、有瑟、其形似筑、彈之亦有音曲、兒生、以石圧其頭、欲令扁、今按魏略曰、辰韓在馬韓東、其耆老伝世、自言古之亡人、避秦役来適韓国、馬韓割東界地与之、有城柵、其言語法俗相似、但名国城為邸、有似秦人、非但労役之間、名国為徒、相呼為秦人、
又巻第八十五東夷伝、倭人在帯方東南大海之中、依山島為国、邑落相望、乍絶乍連、其俗挙事行来、或有所聞、輒大声呼、以相問答、其人寿考、或百年或八九十年、其俗国大人皆四五妻、下戸或二三妻、婦人不淫、不妬忌、不盗竊、少諍訟、其犯法軽者、没其妻子、重者滅其門族、尊卑各有差序、相臣服之、収租賦、有邸閣、国国有市、交易有無、使大倭監之、自女王国以北、特置一大率、検察諸国、諸国畏憚之、常治伊都国、於国中有如刺史、王遣使詣京都帯方郡諸韓国及郡使倭国、皆臨津捜露、伝送文書賜遺之物、詣女王、不得差錯、下戸与大人相逢道路、逡巡入草、伝辞説事、或蹲或跪、両手拠地、為之恭敬、対応声曰噫、比如然諾、其国本亦以男子為王、住七八十年、倭国乱、相攻伐歴年、乃共立一女子為王、名曰卑彌呼、事鬼道、能惑衆、年已長大、無夫壻、有男弟佐治国、自為王以来、少有見者、以婢千人自侍、唯有男子一人、給飲食、伝辞出入、居処宮室楼観、城柵厳設、常有人持兵守衛、女王国東渡海千餘里、復有国、皆倭種、又有侏儒国在其南、人長三四尺、去女王四千餘里、又有裸国黒歯国復在其東南、船行一年可至、参問倭地、絶在海中洲島之上、或絶或連、周旋可五千餘里、
又巻第一下光武帝紀第一下、中元二年春正月、幸東、東夷倭奴国王遣使奉獻、
又巻第八十五東夷伝、倭人在帯方東南大海之中、依山島為国、邑落相望、乍絶乍連、其俗挙事行来、見鳥集、竦木、廣従数百里、木停不流、其中有臭不能得之、倭善網捕、於是東鯷伝人国、得千餘家、徙置秦木上、今埔
魚、以助糧食、
今按邪馬臺国大和国也、古謂大養徳国、所謂倭奴国也、邪馬臺大和和

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

訓也自神武天皇至光仁天皇、都大和国寔二、莅睨記并風俗、是・非混淆無牛馬者非也、神代既有牛馬、出旧事本紀日本書紀、無寔豹者是也、羊鵄雞皆有之、灼骨以卜者、灼麻肩骨以卜也、名太占、或曰肩焼占、馬葉抄訣曰、武蔵野ト部有焼肩聞ト、不祈君仍名卜矣、出ス訶利謂卦也、亦以骨卜見古語拾遺、光武中元二年、當我土垂仁天皇八十六年、検我国史、無孝貢朝賀事、倭国之極南界者、莅民以大和国為我之極南界非也、紀年国土佐国莅摩国某、當為極南界也、安帝永初元年、當景行天皇三十七年、玉海巻一百五十二、永初元年下有冬十月三字、倭国王帥升等、献生口百六十人、願請見者、景行天皇治辞大足考、忍代別所謂帥升等者訛稱也、捨我国史無献生口及請見事、日本紀、旧景行天皇四十年夏六月、東夷多叛、辺境騒動、天皇詔日本武尊、宇之、但本武尊受命征東夷、東夷悉平、所謂倭面等、献於神宮、蝦夷等、書夜喧嘩、出入無礼、時倭姫命曰、是蝦夷等不可近就於神宮、則進上於朝廷、仍令安置御諸山傍、未経幾時、悉伐神山樹、叫訴満国、而脅人民、天皇聞之、詔祥卿曰、其置神山傍之蝦夷、是本有歟、又雖住中国、皆随其情願、令班邑畿之外、是乃播磨、讃岐、伊予、安芸、阿波、凡五国佐伯部之祖也、恐當斯時、亦献蝦夷於漢乎、然日本紀不引後漢書、則不可詳也、見非自謂之辞、蓋願漢帝見於生口也、孝霊天皇時、以蝦夷子孝元天子之意乎、然古代事不可以臆見論之也、垂仁天皇四十八年、擅石槻事、検我国史無之、擅石槻東胡人也、蓋此時、蝦夷之地、所謂不倫、故異類来侵辺境、若其然也、其後海防甚厳、霸威書傳雖載古之大軍、不能上陸、終盡滅於海中、卑弥呼者、神功皇后御名、気長足姫尊、故訛云然、范曄不知我国事、多傳聞之訛、其失山自陳壽志說見下所引魏志中、他則且置焉、所謂以妖惑衆者、慢神也、壽曄當知我国是神国乎、況神功皇后之神霊、天神地祇助之、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

以得三韓非凡夫私智所能測也、誰按日本書紀曰、仲哀天皇時、歲次壬戌、不朝貢天皇親伐之、有神降教伐新羅國、天皇不用神言、而崩、神功皇后傷之、解罪改過、欲知神名、遂以千七百卅九年春二月丁巳朔甲午日七夜、神降言、名乃祭之、然後令吉備祖鴨別擊蝦夷、未決、辰巳、自眼、皇后裳神裁之靈、葬臣之助、興師西征、時海中大魚浮扶船、大風順吹、不労櫂楫、便到新羅、随船潮浪遠遠国中、新羅王大恐曰、新羅建以来未嘗聞海水浸國、若天運盡、國為海乎、言未訖、船師滿海、旌旗耀日、鼓吹聲、山川悉震、新羅王曰、吾聞東有神國、謂日本、必其國之神兵也、豈可擧兵以拒乎、乃面縛降於王船之前、皇后解其縛、遂入其國中、封重宝、収図籍之簿、首蕃王百済王、因新羅降於日本国、委伺其軍訖、乃知不可勝、自来于営外、叩頭曰、自今以後永称西蕃、不絶朝貢、皇后帰自新羅、摂政三年冬十月、皇后誉田別皇子、当宝太子、親以則知皇后之神霊、而寿躋之矣自破矣、夷洲澶洲皆指日本海島、相傳紀伊国熊野

飛鳥之山又謂迹莫山也以知飛鳥神境内有徐福祠也是熊野之神呈也

山下、飛鳥之地、有徐福墳、又曰熊野新宮東南有蓬莱山、山有徐福祠、近沙門絶海入明、太祖皇帝召見、指日本國、顧問海邦遺跡、歎賜熊野詩、海、寿曰、熊野峰前徐福祠、蒲山藥草俱餘肥、只今海上波濤穏、萬里舟航須早帰、帝製賜和、曰熊野峰高血食祠、扶桑現有蓬萊藥、所謂徐福祠者、謂蓬莱山祠也、此祠屬熊野大権現、熊野大権現者、神代明神、書於国史或隙昭昭也、徐福観国之光、来止、脱於霊鷲之秦、死為神、在熊野三山之間、亦証真人也哉、曰欧陽永叔日本刀歌曰、徐福行時経来楚、逸書百篇今稍存、劉氏引原始秘書曰、日本之学始於徐福、然則其徳可称之、而為始皇則不信也、(吳称日本傳授抄)

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

吳志卷二

孫權、黃龍二年春正月、遣將軍衛溫諸葛直將甲士萬人、浮海求
夷洲及澶洲、亶洲在海中、長老傳言、秦始皇帝遣方士徐福、將童
男童女數千人、入海未達其神乃及仙藥、止此洲不還、世相承有
數萬家、其上人民、時有至會稽貨市、會稽東縣人、海行亦有遭風
流移至亶洲者、所在絕遠、卒不可得至、但編夷洲數千人還、
今按吳孫權黃龍二年、當我神功皇后三十年、明太祖以權伐
夷洲、為件日本事、見御製文集、故表出于此、然日本書紀不引
之、

晉平陽侯相陳壽撰述　宋西磵侯裴松之集註

予向日撰後漢書、則夷洲澶洲、在會稽海外、為徐福所止之地、
以二洲雖列于陵下、然我舊記竟此洲名則似非倭地也、吾子
前以為我海島、今亦引吳志者何謂也、答曰二洲名雖無所見、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

以表亶当日本

王充之說可從也孔当因而不書文字也予不信矣點筆

古謂常世鄉者乃今之伊豫諸島其他乎千今千之昔與昭南之野馬黃之王古疑蛟南洋之地可發古也

諸書多謂徐福来二日本、則以二洲為日本地可也、參差前後則其蓁盡矣、

又曰我邊中國漢時為始、文字亦興、逮王充以為周時通、以說似有理、見我國史、神武天皇以後、紀年月日時分明、由是觀之、盖我邊中國在神武之未、至神武天皇經學盛行于、日本之學非始於徐福也、

我又關曰、日本紀曰、聚常世之長鳴鳥、於彼名命適常世國、三毛入野命往常世鄉、遣田道間守于常世國、倶指中國否答曰常世者蓬萊仙嶋也、記及古記、則我國蓋二有之、又指絶域遠民物語、胡謂常世之類是也未惟指中國也、（異称日本傳）

金峰山云古郡或古蓬山

国城并市部第四十三

日本国市名倭国東海中、秦時、徐福将三百童男五百童女止此国也、今人物一如長安、又顕徳五年歳在中午、有日本国傳瑜伽大教弘順大師賜紫寛輔、又云、本国都城南五百餘里有金峰山、頂上有金剛蔵王菩薩第一霊異、山有松檜名花數草、大小寺數百節行、高道者居之、不曾有女人等上、至今男子欲上、三月斬含肉飲食、所未皆遂云、菩薩是権勤化身、五臺文殊、又東北千餘里、有山名富士、亦名蓬萊、其山峻、三面是海、一条上徑、頂有火煙日中上有諸寶流下、夜即卽上、常聞音樂、徐福止此、謂蓬萊、至今子孫皆曰秦民、彼国古今無侵奪者、敵神擁護、法不殺人、為過者恥在犯人盡、其他靈境名山、不及一一記之、

今按五代史無日本傳義楚六帖說日本事相善可以補五代
史闕也後周太祖顯德五年當我士村上天皇天德二年入吉峰
山在大和國吉野郡所謂吉野山也富士山在駿河國富士郡
（異祖日本傳）

太平御覽卷第七百八十二

翰林院学士承旨正奉大夫行工部尚書知制
誥上柱国勲二百戸賜紫金魚袋臣李昉等奉

勅撰

四夷部三　東夷三

倭　日本　紀岐人

蛇夷國

倭

後漢書曰倭在韓東南大海中依山川為居凡百國漸有朝
聘使詣通於漢者三十許國倭王居邪馬臺國云
今按太平御覽所引後漢書以下文余與正史參考同者略之
以云々摂之正史全文皆見上
魏志曰倭國在帶方東南大海中云云
里其俗男子無大小皆黥面文身自謂太伯之後又云

駅者駅馬乎

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

自二上古一以来其使詣中朝者皆自謂二大夫之後一今既去二其号一而猶有二大夫之稱一蓋夷俗重二其官一而不レ重二其爵一也

唐書曰日本国者倭国之別種也以二其国在一レ日所一レ出以為レ名或曰倭国自悪二其名不一レ雅改為二日本一或曰日本乃小国為二倭国一所レ并故冒二其号一有二其地一東西南北各数千里西界南界咫尺大海東北界皆窮二于大海一其王姓阿毎氏自二上古一以来未レ嘗レ通二于中国一惟聞二其西有一レ海水一而已

後漢書曰建武中元二年倭奴国奉レ貢朝賀使人自称二大夫一倭国之極南界也光武賜二以印綬一

安帝永初元年倭国王帥升等獻二生口百六十人一願レ見二於天子一

桓帝延熹九年倭王遣二使獻一レ物

魏志曰倭人在二帯方東南大海之中一依二山島一為レ国邑旧百余国漢時有二朝見者一今使訳所レ通三十国

従レ郡至二倭一循二海岸一水行歴二韓国一乍南乍東到二其北岸狗邪韓国一七千余里

始度レ一レ海千余里至二対馬国一其大官曰二卑狗一副曰二卑奴母離一所居絶島方可四百余里土地山険多二深林一道路如二禽鹿径一有二千余戸一無二良田一食二海物一自活乗二船南北市糴一

又南渡レ一レ海千余里名曰二瀚海一至二一大国一官亦曰二卑狗一副曰二卑奴母離一方可三百里多二竹木叢林一有二三千許家一差有二田地一耕田猶不レ足レ食亦南北市糴

又渡レ一レ海千余里至二末盧国一有二四千余戸一山海浜居草木茂盛行不レ見レ前好捕二魚鰒一水無二深浅一皆沈没取レ之

東南陸行五百里到二伊都国一官曰二爾支一副曰二泄謨觚柄渠觚一有二千余戸一世有二王一皆統二属女王一郡使往来常所レ駐

東南至二奴国一百里官曰二兕馬觚一副曰二卑奴母離一有二二万余戸一

東行至二不弥国一百里官曰二多模一副曰二卑奴母離一有二千余家一

南至二投馬国一水行二十日一官曰二弥弥一副曰二弥弥那利一可二五万余戸一

南至二邪馬壹国一女王之所レ都水行十日陸行一月官有二伊支馬一次曰二弥馬升一次曰二弥馬獲支一次曰二奴佳鞮一可二七万余戸一

自レ女王国以北特置二一大率一検二察諸国一諸国畏二憚之一常治二伊都国一於レ国中有レ如二刺史一王遣レ使詣二京都帯方郡諸韓国一及郡使レ倭皆臨二津捜一レ文書賜遺之物伝送文書不レ得二差錯一

正始元年太守弓遵遣二建中校尉梯儁等一奉二詔書印綬一詣二倭国一拝二假倭王一并齎二詔賜金帛錦罽刀鏡采物一倭王因上二表答謝一詔不レ忘レ答

正始八年太守王頎到官倭女王卑弥呼与二狗奴国男王卑弥弓呼一素不レ和遣二倭載斯烏越等一詣二郡一説二相攻撃状一遣二塞曹掾史張政等一因齎二詔書黄幢一拝二仮難升米一為二檄告一レ之

卑弥呼以二死一大作二冢径百余歩一徇葬者奴婢百余人更立二男王一国中不レ服更相誅殺当時殺二千余人一復立二卑弥呼宗女壹与一年十三為レ王国中遂定政等以二檄告一レ壹与一壹与遣二倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人一送二政等一還因詣二台一献二男女生口三十人一貢二白珠五千孔青大勾珠二一レ短弁青大勾珠一

晋書曰武帝泰始二年十一月倭人来献二方物一

泰始七年十月倭人来貢二方物一

泰始十年十月倭人来貢二方物一

安帝隆安三年倭王讃万里修レ貢遠誠宜レ甄二可以賜一レ除二授安東将軍倭国王一

讃死弟珍立遣レ使貢二方物一自称二使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王一表求二除正一詔除二安東将軍倭国王一

珍又求二除正一倭隋等十三人一詔所レ除並聴

珍又求二自除一レ正二倭隋等一詔不レ許

済死世子興遣レ使貢二献一詔以二興為一レ使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東将軍倭国王一

興死弟武立自称二使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王一

宋書曰倭国在二高驪東南大海中一世修二貢職一高祖永初二年詔曰倭讃万里修レ貢遠誠宜レ甄可以賜一レ除二授安東将軍倭国王一

讃死弟珍立遣レ使貢二献一自称二使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王一表求二除正一詔除二安東将軍倭国王一

珍又求二除正一倭隋等十三人一詔所レ除並聴

珍又求二自除一レ正二倭隋等一詔不レ許

済死世子興遣レ使貢二献一詔以二興為一レ使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東将軍倭国王一

興死弟武立自称二使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王一

順帝昇明二年遣レ使上表曰封国偏遠作レ藩二于外一自二昔祖禰一躬二擐甲冑一跋二渉山川一不レ遑二寧処一東征毛人五十五国西服衆夷六十六国渡二平海北九十五国一王道融泰土地開廓

順帝昇明二年遣レ使上表曰封国偏遠作レ藩二于外一自二昔祖禰一躬二擐甲冑一跋二渉山川一不レ遑二寧処一東征毛人五十五国西服衆夷六十六国渡二平海北九十五国一王道融泰土地開廓

齊書曰倭国在二高驪東南大海中一世修二貢職一

建元元年進二新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王武一号鎮東大将軍

梁書曰倭者自二帯方東南大海中一依二山島一為レ居

漢光武時遣レ使朝貢自称二大夫一

安帝時又遣レ使貢二生口一

桓霊間倭国大乱更相攻伐歴レ年無レ主

有二一女子一名曰二卑弥呼一年長不レ嫁事二鬼道一能惑二衆一於是共立為レ王

侍婢千人罕レ有二見者一唯有二男子一人給二飲食一伝二辞語一居二処宮室楼観城柵厳設一常有二人持レ兵守衛一

女王国東渡レ海千里復有二国皆倭種一

又有二侏儒国一在二其南一人長三四尺去二女王四千余里一

又有二裸国黒歯国一復在二其東南一船行一年可至

倭地温暖冬夏食二生菜一皆徒跣

有二屋室一父母兄弟臥息異レ処以二朱丹一塗レ身如二粉一レ面也

有二文身一者有二黥面一者有二点レ面一者有二画レ身一者

以二別尊卑一各有二差次一

男子無二大小一皆黥面文身

自レ古以来其使詣二中朝一者皆自謂二大夫一夏后少康之子封二於会稽一断二髪文身一以避二蛟龍之害一今倭亦文身蓋其遺俗也

自二上古一以来其使詣中朝者皆自謂二大夫一蓋夷俗重二其官一而不レ重二其爵一也

今按開其奏語自謂大伯之後今既去無此文故備存之宜考

日本国

唐書曰日本国者倭国之別種也以二其国在一レ日所一レ出以為レ名或曰倭国自悪二其名不一レ雅改為二日本一或曰日本乃小国為二倭国一所レ并故冒二其号一有二其地一東西南北各数千里西界南界咫尺大海東北界皆窮二于大海一其王姓阿毎氏自二上古一以来未レ嘗レ通二于中国一惟聞二其西有一レ海水一而已

後漢書曰建武中元二年倭奴国奉レ貢朝賀使人自称二大夫一倭国之極南界也光武賜二以印綬一

安帝永初元年倭国王帥升等獻二生口百六十人一願レ見二於天子一

桓帝延熹九年倭王遣二使獻一レ物

魏志曰倭人在二帯方東南大海之中一依二山島一為レ国邑旧百余国漢時有二朝見者一今使訳所レ通三十国

従レ郡至二倭一循二海岸一水行歴二韓国一乍南乍東到二其北岸狗邪韓国一七千余里

始度レ一レ海千余里至二対馬国一其大官曰二卑狗一副曰二卑奴母離一所居絶島方可四百余里土地山険多二深林一道路如二禽鹿径一有二千余戸一無二良田一食二海物一自活乗二船南北市糴一

又南渡レ一レ海千余里名曰二瀚海一至二一大国一官亦曰二卑狗一副曰二卑奴母離一方可三百里多二竹木叢林一有二三千許家一差有二田地一耕田猶不レ足レ食亦南北市糴

又渡レ一レ海千余里至二末盧国一有二四千余戸一山海浜居草木茂盛行不レ見レ前好捕二魚鰒一水無二深浅一皆沈没取レ之

東南陸行五百里到二伊都国一官曰二爾支一副曰二泄謨觚柄渠觚一有二千余戸一世有二王一皆統二属女王一郡使往来常所レ駐

東南至二奴国一百里官曰二兕馬觚一副曰二卑奴母離一有二二万余戸一

東行至二不弥国一百里官曰二多模一副曰二卑奴母離一有二千余家一

南至二投馬国一水行二十日一官曰二弥弥一副曰二弥弥那利一可二五万余戸一

南至二邪馬壹国一女王之所レ都水行十日陸行一月官有二伊支馬一次曰二弥馬升一次曰二弥馬獲支一次曰二奴佳鞮一可二七万余戸一

自レ女王国以北特置二一大率一検二察諸国一諸国畏二憚之一常治二伊都国一於レ国中有レ如二刺史一王遣レ使詣二京都帯方郡諸韓国一及郡使レ倭皆臨二津捜一レ文書賜遺之物伝送文書不レ得二差錯一

正始元年太守弓遵遣二建中校尉梯儁等一奉二詔書印綬一詣二倭国一拝二假倭王一并齎二詔賜金帛錦罽刀鏡采物一倭王因上二表答謝一詔不レ忘レ答

正始八年太守王頎到官倭女王卑弥呼与二狗奴国男王卑弥弓呼一素不レ和遣二倭載斯烏越等一詣二郡一説二相攻撃状一遣二塞曹掾史張政等一因齎二詔書黄幢一拝二仮難升米一為二檄告一レ之

卑弥呼以二死一大作二冢径百余歩一徇葬者奴婢百余人更立二男王一国中不レ服更相誅殺当時殺二千余人一復立二卑弥呼宗女壹与一年十三為レ王国中遂定政等以二檄告一レ壹与一壹与遣二倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人一送二政等一還因詣二台一献二男女生口三十人一貢二白珠五千孔青大勾珠二一レ短弁青大勾珠一

晋書曰武帝泰始二年十一月倭人来献二方物一

泰始七年十月倭人来貢二方物一

泰始十年十月倭人来貢二方物一

安帝隆安三年倭王讃万里修レ貢遠誠宜レ甄二可以賜一レ除二授安東将軍倭国王一

讃死弟珍立遣レ使貢二献一自称二使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王一表求二除正一詔除二安東将軍倭国王一

珍又求二除正一倭隋等十三人一詔所レ除並聴

珍又求二自除一レ正二倭隋等一詔不レ許

済死世子興遣レ使貢二献一詔以二興為一レ使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東将軍倭国王一

興死弟武立自称二使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王一

宋書曰倭国在二高驪東南大海中一世修二貢職一高祖永初二年詔曰倭讃万里修レ貢遠誠宜レ甄可以賜一レ除二授安東将軍倭国王一

讃死弟珍立遣レ使貢二献一自称二使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王一表求二除正一詔除二安東将軍倭国王一

珍又求二除正一倭隋等十三人一詔所レ除並聴

珍又求二自除一レ正二倭隋等一詔不レ許

済死世子興遣レ使貢二献一詔以二興為一レ使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東将軍倭国王一

興死弟武立自称二使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王一

順帝昇明二年遣レ使上表曰封国偏遠作レ藩二于外一自二昔祖禰一躬二擐甲冑一跋二渉山川一不レ遑二寧処一東征毛人五十五国西服衆夷六十六国渡二平海北九十五国一王道融泰土地開廓

順帝昇明二年遣レ使上表曰封国偏遠作レ藩二于外一自二昔祖禰一躬二擐甲冑一跋二渉山川一不レ遑二寧処一東征毛人五十五国西服衆夷六十六国渡二平海北九十五国一王道融泰土地開廓

齊書曰倭国在二高驪東南大海中一世修二貢職一

建元元年進二新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王武一号鎮東大将軍

梁書曰倭者自二帯方東南大海中一依二山島一為レ居

漢光武時遣レ使朝貢自称二大夫一

安帝時又遣レ使貢二生口一

桓霊間倭国大乱更相攻伐歴レ年無レ主

有二一女子一名曰二卑弥呼一年長不レ嫁事二鬼道一能惑二衆一於是共立為レ王

侍婢千人罕レ有二見者一唯有二男子一人給二飲食一伝二辞語一居二処宮室楼観城柵厳設一常有二人持レ兵守衛一

女王国東渡レ海千里復有二国皆倭種一

又有二侏儒国一在二其南一人長三四尺去二女王四千余里一

又有二裸国黒歯国一復在二其東南一船行一年可至

倭地温暖冬夏食二生菜一皆徒跣

有二屋室一父母兄弟臥息異レ処以二朱丹一塗レ身如二粉一レ面也

有二文身一者有二黥面一者有二点レ面一者有二画レ身一者

以二別尊卑一各有二差次一

男子無二大小一皆黥面文身

自二上古一以来其使詣二中朝一者皆自謂二大夫一夏后少康之子封二於会稽一断二髪文身一以避二蛟龍之害一今倭亦文身蓋其遺俗也

自二上古一以来其使詣中朝者皆自謂二大夫一蓋夷俗重二其官一而不レ重二其爵一也

今按開其奏語自謂大伯之後今既去無此文故備存之宜考

日本国

唐書曰日本国者倭国之別種也以二其国在一レ日所一レ出以為レ名或曰倭国自悪二其名不一レ雅改為二日本一或曰日本乃小国為二倭国一所レ并故冒二其号一有二其地一東西南北各数千里西界南界咫尺大海東北界皆窮二于大海一其王姓阿毎氏自二上古一以来未レ嘗レ通二于中国一惟聞二其西有一レ海水一而已

後漢書曰建武中元二年倭奴国奉レ貢朝賀使人自称二大夫一倭国之極南界也光武賜二以印綬一

安帝永初元年倭国王帥升等獻二生口百六十人一願レ見二於天子一

桓帝延熹九年倭王遣二使獻一レ物

魏志曰倭人在二帯方東南大海之中一依二山島一為レ国邑旧百余国漢時有二朝見者一今使訳所レ通三十国

従レ郡至二倭一循二海岸一水行歴二韓国一乍南乍東到二其北岸狗邪韓国一七千余里

始度レ一レ海千余里至二対馬国一其大官曰二卑狗一副曰二卑奴母離一所居絶島方可四百余里土地山険多二深林一道路如二禽鹿径一有二千余戸一無二良田一食二海物一自活乗二船南北市糴一

又南渡レ一レ海千余里名曰二瀚海一至二一大国一官亦曰二卑狗一副曰二卑奴母離一方可三百里多二竹木叢林一有二三千許家一差有二田地一耕田猶不レ足レ食亦南北市糴

又渡レ一レ海千余里至二末盧国一有二四千余戸一山海浜居草木茂盛行不レ見レ前好捕二魚鰒一水無二深浅一皆沈没取レ之

東南陸行五百里到二伊都国一官曰二爾支一副曰二泄謨觚柄渠觚一有二千余戸一世有二王一皆統二属女王一郡使往来常所レ駐

東南至二奴国一百里官曰二兕馬觚一副曰二卑奴母離一有二二万余戸一

東行至二不弥国一百里官曰二多模一副曰二卑奴母離一有二千余家一

南至二投馬国一水行二十日一官曰二弥弥一副曰二弥弥那利一可二五万余戸一

南至二邪馬壹国一女王之所レ都水行十日陸行一月官有二伊支馬一次曰二弥馬升一次曰二弥馬獲支一次曰二奴佳鞮一可二七万余戸一

自レ女王国以北特置二一大率一検二察諸国一諸国畏二憚之一常治二伊都国一於レ国中有レ如二刺史一王遣レ使詣二京都帯方郡諸韓国一及郡使レ倭皆臨二津捜一レ文書賜遺之物伝送文書不レ得二差錯一

正始元年太守弓遵遣二建中校尉梯儁等一奉二詔書印綬一詣二倭国一拝二假倭王一并齎二詔賜金帛錦罽刀鏡采物一倭王因上二表答謝一詔不レ忘レ答

正始八年太守王頎到官倭女王卑弥呼与二狗奴国男王卑弥弓呼一素不レ和遣二倭載斯烏越等一詣二郡一説二相攻撃状一遣二塞曹掾史張政等一因齎二詔書黄幢一拝二仮難升米一為二檄告一レ之

卑弥呼以二死一大作二冢径百余歩一徇葬者奴婢百余人更立二男王一国中不レ服更相誅殺当時殺二千余人一復立二卑弥呼宗女壹与一年十三為レ王国中遂定政等以二檄告一レ壹与一壹与遣二倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人一送二政等一還因詣二台一献二男女生口三十人一貢二白珠五千孔青大勾珠二一レ短弁青大勾珠一

晋書曰武帝泰始二年十一月倭人来献二方物一

泰始七年十月倭人来貢二方物一

泰始十年十月倭人来貢二方物一

安帝隆安三年倭王讃万里修レ貢遠誠宜レ甄二可以賜一レ除二授安東将軍倭国王一

讃死弟珍立遣レ使貢二献一自称二使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王一表求二除正一詔除二安東将軍倭国王一

珍又求二除正一倭隋等十三人一詔所レ除並聴

珍又求二自除一レ正二倭隋等一詔不レ許

済死世子興遣レ使貢二献一詔以二興為一レ使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東将軍倭国王一

興死弟武立自称二使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王一

宋書曰倭国在二高驪東南大海中一世修二貢職一高祖永初二年詔曰倭讃万里修レ貢遠誠宜レ甄可以賜一レ除二授安東将軍倭国王一

讃死弟珍立遣レ使貢二献一自称二使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王一表求二除正一詔除二安東将軍倭国王一

珍又求二除正一倭隋等十三人一詔所レ除並聴

珍又求二自除一レ正二倭隋等一詔不レ許

済死世子興遣レ使貢二献一詔以二興為一レ使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東将軍倭国王一

興死弟武立自称二使持節都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王一

順帝昇明二年遣レ使上表曰封国偏遠作レ藩二于外一自二昔祖禰一躬二擐甲冑一跋二渉山川一不レ遑二寧処一東征毛人五十五国西服衆夷六十六国渡二平海北九十五国一王道融泰土地開廓

順帝昇明二年遣レ使上表曰封国偏遠作レ藩二于外一自二昔祖禰一躬二擐甲冑一跋二渉山川一不レ遑二寧処一東征毛人五十五国西服衆夷六十六国渡二平海北九十五国一王道融泰土地開廓

齊書曰倭国在二高驪東南大海中一世修二貢職一

建元元年進二新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王武一号鎮東大将軍

梁書曰倭者自二帯方東南大海中一依二山島一為レ居

漢光武時遣レ使朝貢自称二大夫一

安帝時又遣レ使貢二生口一

桓霊間倭国大乱更相攻伐歴レ年無レ主

有二一女子一名曰二卑弥呼一年長不レ嫁事二鬼道一能惑二衆一於是共立為レ王

侍婢千人罕レ有二見者一唯有二男子一人給二飲食一伝二辞語一居二処宮室楼観城柵厳設一常有二人持レ兵守衛一

女王国東渡レ海千里復有二国皆倭種一

又有二侏儒国一在二其南一人長三四尺去二女王四千余里一

又有二裸国黒歯国一復在二其東南一船行一年可至

倭地温暖冬夏食二生菜一皆徒跣

有二屋室一父母兄弟臥息異レ処以二朱丹一塗レ身如二粉一レ面也

有二文身一者有二黥面一者有二点レ面一者有二画レ身一者

以二別尊卑一各有二差次一

男子無二大小一皆黥面文身

帰二本国一使請奨空向帰途之開皇四年又遣使朝貢

綜奨人

外国紀曰周詳這海路綜奨上多経有二三千余家一云這徐福童男之後風俗似二吾人一

今按綜奨不知指何地這今八丈島歟

蝦夷国

唐書曰蝦夷国海島中小国也其使類二於会人一鄙而三数十歩射之矢不中者明慶四年十月随二倭使一入朝

今按明慶當作二顯慶一顯慶高宗年号顯慶四年當日本齊明天皇五年（異稿日本傳）

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

徐福撰 徐夫

琉球代醉編卷之九　　姑蘇張鼎恩齋父父輯

外國書　　贅舍士過父校　　蒼梧楊

歐陽公日本刀歌徐福行時經夫焚逆書百篇今尚存令嚴不許傳中國舉世無人識古人由是觀之則尚書全文日本國尚有之也聖天子德威遠播梯航日出之邦聖賢遺書必有隨玉帛而來者此千古大快事也

皇家無姓使不能解也 徐福来

今按倭書者明黄仲昭所撰百五十四巻其間往々記日本事也詳見福清何喬遠閩書巻八閩事也

倭夷志

日本古倭國在東海中、繞波而宅、自言蓬萊浪底於徐福東笑所通中國靈異電萬餘里、其地東高西下、夢谷精蛉、古亦曰蜻蜓國也、國君居山城、以王為姓、以尊為歸徐福當五百童男女入海、當秦始皇求仙、無所得、懼不敢歸、遂居焉、今甚富也、所統五州七道三島、為郡五百有奇、皆依木據大者不過中國一村落而已、戸可七萬餘、課丁八十八萬三千有奇、而損農作數、若佐博多、其民相矜以貿積貸、或百萬、私梟一州鼎食、擊鐘而誇、俗有中國之風也、薩摩之鵜毛里、其民循禮、重為君、獨伊紀之鼉陀僧三千八百房、蝦蝎羯羅者殺、而薩摩既後長門三州之人景喜入寇、諸州部統於山口豐後出雲三軍門、三軍門相攜、國人為三、而總屬山城君、以後豐後獨強、國人服之、會於山城、其朝貢始末、具載前史、元時世祖遣星的赤良卿等諭之不至（七郎曰以下明抄本日本傳抄抄）

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

徐福攜子往来

聽雨紀談　吳郡　都穆著

朱子於經傳多有訓釋、惟尚書則否、蓋以其多錯簡脫文、非古文之全也、蔡氏書傳序云、二典禹謨先生蓋嘗是正、則其他固未之及、世所傳有朱子書說、蓋當時門人取語錄文集中語以成之、非朱子意也、或謂日本國有真本尚書、入徐福入海時所携者、予初未信之、後觀歐陽公日本刀詩有云、徐生行時書未焚、逸書百篇今尚存、今秪不許傳中國、擧世無人識古文、先生大典蓬萊頗若陵陰場無通津則外國真有其本、歐公之言未必無據、朱子之不注有豈以是耶（異稱日本傳）

皇明世法録巻之七十九　奉議　史官　陳仁錫　許鑾　纂

日本考

日本古倭奴國、天御中主都筑紫、歸大倭王、傳三十三世、彦瀲尊第四子神武天皇、自筑紫入都大和、外孫崇神天皇、初稱御肇國天皇、有一女子、名卑彌呼、事鬼神道、能以妖惑衆、乃共立為王、在位數年死、宗男嗣、國人不服、更相誅殺、立卑彌呼宗女臺與、年十三為王、國遂定、遣使詣魏貢獻、晉武帝泰初二年、又遣重譯貢男女生口十人、貢更號日本、蓋近畿日始升之義、先時秦遣徐福、將童男女數千人入海、未達蓬仙、不得、懼誅止夷洲、三百餘家、世相承、有數萬戸、其上人時一至會稽、貿易布、其之曰徐倭、非日本、正歸、性狙詐、好徙、多相攻擊、依山島為居、西南皆距海、東北隔以大山、廣袤四面各數千里、東北山外壁毛人國、又有小人國、又有裸國、黒齒國、船行一年可至、絶遠不可往、又東南行七千餘里、南到侏儒國、約七千餘

名畢須呼年長不嫁、史文混淆矣、

一支考堂蔵
駿河国新風土記

星、西備一丈、正北望駿羅、渡百済、到楽浪、約一萬二千里、云々（
十郎曰以下略
依景行紀日本傳）

西国三十三所名所図絵　西一、三十九丁

浪花人　暁鐘居著

秦徐福墳　新宮の鳥居より五丁ばかり
碑を建て印す　書写梅渓也　墳の上に榎木二三本あり
南紀名勝略誌云　徐福祠　新宮古熊野村の西南にあり　今
祠あり　土人墓所を榎簇という
順礼伝記云　新宮の下馬より十六丁東　徐福祠あり　世
俗遷葉山というふ　伝りとそ　此所をさして云へるなり

熊野の浦辺に素の徐福が墳ともあり

九十九里の浜中に死せる葉を埋めしと

秦始皇帝徐福をして海中に神薬を求めしむ　徐福数年
を経ていへども薬を得ず　乃ち詐曰　海中に於て神
を始皇の謫んことを　請ふて　童男童女数千人を
ひきいて　ふたゝび来らず　ことを得ず　遂に亡命して
ふる　蓋曰等を延寿を　蓋曰等を請ふ　ことを願ふ　神曰

秦王の礼薄ー改ム覩と
ち臣を往ろへ〻て東南の
ム使へ〻る者あり銅や〻
ち是〻よりち臣年拝し
へき也海外の同舎者の男子若くは婦女百工の事とを
以てやゝ卑是を得んと素妬臣是を聞て大に悦び報
男女三千人をして是か五穀の種に百工を備らしめて
行しむと云ゝ（此処に列像ありは後稿と同じ）
蓬萊名勝畫圖云徐福昇仙人皇七代孝靈帝六年也云
後漢書東傳に據るに明ム人太祖徐福の事を問答
本朝紀の中津絶海と呉ー
ム詩を以て曰（詩右に在り係て略ス）

（コクヨ㊞（四三一号））

大祖和曰（詩前に在り係て略ス）
日本王代一覧曰人王七代孝靈天皇甲代昇明ま〻い
秦の始皇の時ム童ら雑類いふ者蓬萊山ム其の
猜んと〻日本ム渡る云ゝ
熊鳥神社紀州牟ム婁ム村ム在り新宮の北ム当る
本社 紫津大宮姫命 新宮速玉尊也又東の一座ハ新宮の
徐福祠本社の傍ム在り

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

本朝通紀（西暦三十三年条所引岡麓所載）

人皇第七孝霊天皇七十二年秦徐福来朝。

時始皇好仙術東遊海上於是徐方士徐福奏童男女三千人入海

求蓬萊神仙不死之薬徐福来朝遂不得其薬畏誅不敢還在蟠

歸牟子孫皆曰秦氏

紀伊国名所図絵　加納諸平、

今要部之部　新宮之部

徐福神社　上熊野村の中にあり蓬莱山と呼ぶ

祀神　早玉男命　事解男命　相殿

本地は大威徳明王也毎年九月十五日祭礼を執行ふ

時内陣より御幣を錦の袋を取出し其徳馬に乗せ神事を

勤むる

日月宮神武神社　境内に在

薬師天社　境内に在

河面宮　徐福の初　境内に在

秦徐福墓　熊野村田相の中にあり石碑有り所を掲載と云

相傳ふ秦始皇方士徐福を遣し童男童女数千人を将て

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

海を渡り遠東山（入り神仙不死の藥を求めしと云ひ七
仲孝雲天皇七十二年壬申来り南紀熊野の山に入り所在を知らず
所土葬す其子孫今尚此地に住すと
（以下引論書略者略）

明治年中駐日英国公使 蔡珠昌 無二往福ノ墓ヲ展
又昨時ノ新宮町旅舎油屋ノ宿帳ニ署名捺印ヲ
アルヲ見タリ

昭和十六年三月十二日 駐日中華民国大使 随員証ヲ参照

徐福の墓へ

念願成つて
喜ぶ駐日大使

門には大日章旗と青天白日國旗
紅旗が掲げられ大使は率先
「徐福の墓」の隧道に進み

林新宮高女教諭の説明を聞き記
念のカメラに納つてのち、名残
りを惜しみつゝ、廟を後にして汽

山下汽船株式會社
電話三宮二〇四四、五二四〇
大阪西三二一八三〇
名古屋支店 名古屋市中区南大津町十七日
南米行 新興丸 阪十六日神十七日
物船 欧洲行 新興丸

紐育南米行 山月丸 二十六日
羅府行 山勇丸 二十六日
沙市晩市行 桑山丸 十九日
メ ア行 楠山丸 三十一日
洲行 興業丸 四月十日
濠 ベルシア行 満栄丸 二十三日
ニ ラ行 山風丸 四月一日
セマ

作所

利息支拂ノ方法及期限
元利金支拂場所
擔保
受託會社
擔保ノ價格ニ關スル調査報告
申込期間
申込證據金

第物
壹上
回擔
は保

年年參月拾日限
即年間年分ヲ
募集ノ參拾口
支店
同會社所有ノ
株式會社日本
行
前記工場財團
ニ足ル價格ヲ
參月拾參
但期間中ニ
額壹百圓付ニ
面

第二万千三百四十四号

びしくなつて來た。あたしのひとりよがりの腹がりなんて、なんでもなかつたのね。生活のただかひなんて——なにを生意氣のことを考へたり、いつたりしてたか、と、自分をわらつてやりたい氣持になつて來たの。ちよつとした餓鬼で、もう眼を廻してしまふなんて、なんて、だらしがないんでせう。いつそ、那がほんとになくなつてゐるだら、もつと、ちやんとしたかも知れない。——これは貧け

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

海を渡り遠葉山上に入り神仙不死の藥を求めまゐ人皇七
代孝霊天皇七十二年壬申春三月帝崩ず時に年百六十
所生葵子孫今尚繁茂と聞く
（以下引用書省略）

明治年中駐日清国公使
[illegible]時ノ孫詩ニ新宮町両旅舎油屋ノ書額ヲ賦
[illegible]ノ見ヨリ
昭和十六年三月十二日駐日中華民国大使徐福ノ墓ニ詣ル

徐福の墓へ 念願成つて喜ぶ褚大使

大朝 昭和十六年三月十三日 （第三種郵便物認可）



美人徐福の墳墓を訪ねて熊野地方へ四時五十五分新宮駅着、一般市民ら多数が出迎へるうちに自動車で熊野速玉神社に参拝、宝物を拝観、徐福墓納と傳へられる墳墓に参拝した

〔日支親善の旅に上つた中華民国駐日大使閣下徐氏一行は十二日午後四時五十五分新宮駅着、一般市民ら多数が出迎へるうちに自動車で熊野速玉神社に参拝、宝物を拝観、徐福墓納と傳へられる墳墓に参拝した後、一行を乗せた自動車は熊野川を渡つて新宮町に入り、同町の旅舎油屋で昼食を認めたのち目指す熊野地の徐福の墓に詣でた

門には大日章旗と青天白日満地紅旗が掲げられ大使は非常な『この墓徐福之墓』の墳前に進み恭しく香を捧げ日支文化関係史上の照徹の情景を描いた、木村新宮市長から場内の様の説を聞かられ『はゞ大使館の庭に植えまそう』と大喜びで、植野中将林新宮署長の説明を聴き記念のカメラに納つてのち、名残りを惜しみつゝ園を後にして浮島の森を見物、六時から林景園で開かれた新宮市ならびに関係会主催の歓迎晩餐会に臨み同夜は油屋旅館に一泊した

今回果した褚大使は『徐福廟で誓つた以上は目的を果してこんなうれしいことはありません、立派に遺跡が保存されてゐることは感謝のほかありません、古い文献とともに貴殿の御造力で昔が偲ばれるわけで両国の親善に貢献するところが大きいと思ひます中国の国賓人は『徐福のことは知つてゐますが熊野にあることとはおまり知られぬ事柄です、私は園を十六日に発めましたが歸国の上は近所にも見せしまず、また私自身こゝに園をたてるつもりです』

なほ大使一行は今十三日午前八時新宮発プロペラ船で勝浦に遊んでのち那智に登山し勝浦温泉の湯に一泊の豫定（新宮）

徐福廟に参拝の褚大使（右端）＝新宮より本社機撮影

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03943

約す徐福の顯彰

【楮大使】けふ瀞峡に清遊

昭和五年三月廿四日大朝

行案　昨日

徐福祠に參詣して十二日夜新宮市に一泊した【楮日本】華民國大使閣下一行は新宮市擧げての歡迎に對し日【楮】の樂としての徐福祠參詣と年一度の來熊を約したが、十三日は一行とともに午前八時半木材市長ら官民多數の見送りを受けて新宮川汽船特別プロペラ船あすか丸で瀞峡に遊び、【楮】の大歡迎を受勝した

かくて午後二時半再び新宮へ戻り丹鶴旅社晝食のち那智山に參詣、勝浦町越ノ湯温泉に一泊の豫定、十四日は瀞峡を經て白良に向ふ（新宮）

屋見

秦姓ノ事

大日本史卷之百七十二

氏族志
神別

天神

物部氏、弓削氏、韓国氏、蔵智氏、若湯氏、秦氏、弥栄氏、（中略）

阿刀氏、良賀氏、熊野氏、（中略）楫本氏、采女氏、穂積氏、（中略）

皆神饒速日命之後也

（中略）

秦氏、連十姓、貴、千山、城、

熙載云饒速日命ノ氏族中韓国ニ通信スルモノ多シ、三十種命ノ北韓ヨリ来レルアリ　カラノ言ハ韓国ニ非ス

二命ノ間一脉ノ通ズルモノアルヘシ

唐モカラト訓ス韓ヲ唐人ヲ唐剣カラカネト云　是カラハ外国殊ニ朱那朝鮮

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

大言海

はた（名）（姓）　古語拾遺ニ所見　綾ノ條ニ出ヅ

波陀

（二）はた（縵ニ同ジ）　（三）秦国ヨリ帰化シタル人ノ姓

垂仁紀、秦ノ酒公、秦ノ弓月君ヲ率テ百廿県ノ人夫ヲ領ヒテ来朝ス、ト云フ事ハ、其ノ事セト云フ事ハ、ニヤ　又雄略紀ニ秦ノ民ヲ分チテ、諸ノ漢ノ後ト云フ、

溝右一たる富士山の見えけるを
を掲げおきて書かれり春氏のもの
富士山の描たる書畫のあるもの
百年雪」會花堂備齋等（日本傳
松下氏（見林）云徐福到之
為神在熊野之山之間
今按（備齋）云秦徐福避
而住熊野是云云

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

かはらまぎ

豊額云、こは紀伊国魁岬の秦徐福の故事を、
いひ傳へたるおもむきにて、さくて徐福の事を、大約
素より元邑二舟、漸くにしるせる書の名なり
徐福が皇国に来れりといふ事、漢書諸にも古くい證な
し、歐陽公集日本刀歌の跡み（首肯）傳聞其国居
大東、土壌次饒俗好、其先徐福詐秦云、採藥淹留
止童男、百工五種、止今富庶、風俗類秦、故其
献賜往来、士人能言「詞藻、徐福侍時書未焼、逸書
百篇今尚存、今最不許傳中国、云云詩刀馬温公集
もも皆大同小異なり、されど歐陽全集をもて正とすべし、

これ古刀の銘文を学ばんとするに、和国ノ諸書、徐
福が時より伝はりて、日本の書院のよきいとし漢国の傳を
とゝしるべく、ふたゝてほめん

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943

大正十年五月二日発行 和辻山路 東京 岩波書店 定価 金壹圓
久井田廣吉ノ雑誌「雛の家」大西源一、「雛の
繪硯箱家来傳說」ヲ紹介ス。
雛古
久米邦武博士の日本古代史中ニ雛ノ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03943